

案山子二〇二四 夏

新潟大学文芸部

案山子
二〇二四 夏

新潟大学文芸部

目次

案山子二〇二四 夏	
案山子二〇二四 夏	3
目次	
目次	7
二〇二四夏 お題作品『晴』	
二〇二四夏 お題作品『晴』	11
気安めの青/青空	
気安めの青/青空	15
後翅/木戸みお	
後翅/木戸みお	29
しかいの森/今泉とびら	
しかいの森/今泉とびら	43
初夏逝夏/星屑なつき	
初夏逝夏/星屑なつき	61
晴れ間のエゴイスト/大木田悠琢	
晴れ間のエゴイスト/大木田悠琢	79
日傘/高瀬静	
日傘/高瀬静	115
奥付	
奥付	123

案山子二〇二四 夏

案山子二〇二四 夏

案山子二〇二四 夏

目次

目次

目次

二〇二四夏 お題作品『晴』

二〇二四夏 お題作品『晴』

○夏号 お題作品『晴』

気安めの青

青空

後翅

木戸みお

しかいの森

今泉とびら

初夏逝夏

星屑なつき

晴れ間のエゴイスト

大木田悠琢

日傘

高瀬静

気安めの青/青空

気安めの青/青空

気安めの青

青空

ふと口から零れ落ちた。

「言葉なんか、世界から全部消えちゃえばいいのに」

雨音にも負けそうな声だったと思う。でも、本当に心の底から、僕はそう願った。そんな非現実的なことを、本気で願った夜だった。

「そんな言葉、私の前で言ったってことは、それ相応の覚悟があるってことだよな？」

僕の声と違って、彼女の声は決して雨音なんかには負けていなかった。熱がこもった声。こんな時でもそんな言葉を吐くとは、本当に彼女らしい。彼女は続けて言う。

「言葉がいかに必要か、いかに素晴らしいか、私が教えてあげる」

そんなことを、彼女は言う。

「それでもなお、言葉が消えることを願ったとしたら？」

「うーん、そうだな、そんなことは絶対ないと思うけど。でも、万が一そんなことが起きたら、そしたら、私は？」

雨に混じって涙が、頬を伝う。

「そもそもさ、言葉って、そんなに大切にしなければならぬもの？ 発する言葉一つ一つをさ、人はいちいち考えて話したりなんかしないと思うけど？」

僕の主張。今日は天気予報通り、一日中雨、小雨である。時間帶的には夕方であるが、雨というだけあって、空はやはり薄暗い。さすが梅雨というだけある。

「そーかな。確かに、^{つむぎ}紬の言うことも一理ある。それは認めるよ。でも、何気なく話した言葉にも、人の人生をほんのちょっと変えちゃうような言葉って、きっとあるでしょ？」

彼女はすぐに言葉を返す。彼女の声に棘は見当たらない。しかし、その裏には、決して揺らぐことのない、彼女の意思が確かにあることだけは読み取れた。

「そうだとっても。言葉って、そもそも頼りないものだと思うよ。声とか特に」

「頼りない？」

「そう、頼りない。声なんて何にも残らないじゃん。すぐ消えちゃう。人はよく、大事なことは声に出せていうけど、形にはなんも残らないようなものに、本当に大事なことをさ、託しちゃっていいのかよ？ 声なんて言うのは所詮、空気が揺れてるだけなのにさ」

僕は続けて言う。

「それに人は、平気で嘘をつく生き物だってよく言うじゃん。お前がそうやって心底大事に抱えてる言葉だって、嘘まみれの汚いごみの塊かもよ？」

言い過ぎ、そうかもしれない。駅から家までの帰り道、仮にも「女の子」と二人きり。こんな言葉、女子に向かって言う言葉じゃない。たとえ、気心の知れた幼馴染相手だとしても。そもそも帰り道に、こんな「言葉」について真剣に語っている男女がどこにいる？ 多分、世界のどこを探したって、僕らだけである。あまり綺麗とは言えない言葉を吐いた自覚はある。だけど、僕は彼女に少し怒ってほしかった、感情的になってほしい。そうすることで、この議論の勝敗が少しでも僕に傾けばいい。

「ほうほう、それで？」

僕の願い虚しく、彼女の声色は何も変わっていなかった。むしろ、この会話を楽しんでさえいるような雰囲気だ。たった今発した僕の言葉さえも大事に拾い上げては、新たに抱え込むのだろう。傘で隠れて見えないが、彼女はきっと、いたずらっ子みたいな笑顔を浮かべているはずだ。

「だから、要するに、言葉なんていう簡単に裏切るようなものをさ、信じちゃっていいの？ 言葉なんてそもそも信頼できる代物じゃないんじゃない？ そんなものをさ、お前は宝物みたいに大事に抱えてる必要あるのかよって話」

彼女の青い傘がパッと僕のほうへと開く。彼女の顔が、怒りに染まる、なんてことはなく、悲しそうでもなく、むしろ大好きな餌を前にした猫のような顔だった。この際、何の動物に例えるかはどうでもよくて、彼女が今にも食い掛ろうとする餌こそが僕である、ということのほうが重要だ。待ってましたと言わんばかりの勢いで、言葉を放つ。

「確かに、声なんてのは形には残らないけど、声じゃなきゃ伝わんないことだって、たくさんあるでしょ。残念なことに、文字だけじゃ伝わんないことが案外多かったりするのよ、この世の中は。それに形がないからって、必ずしも頼りないとは限らないと思うのですよ、紬君！」

「どういう意味？」

「いや、だから、意外と声の方が重かったりするんじゃないって話。形に残らないけど、心まで響く言葉ってあるからね。物理的に、それこそ、振動を感じるわけですよ、私たちは。体で、耳で。そう考えたら、私たちに直接、物理的に届いちゃう、響いちゃう声っ

て、文字なんかよりずっと、影響を及ぼすものなんじゃない？ それに、声って人それぞれ違うしね。どう、段々声の価値が上がってきたんじゃない？」

彼女は、言葉巧みに語る。

「でも、人は嘘をつくよ。それでも、嘘ばかりの言葉も大事って言える？」

「うん、言える」

何の迷いも感じさせることなく、彼女は言い切った。

「嘘って、そんな悪いものだと思ってないからね、私。多少の嘘は生きていくために必要でしょ？　嘘の言葉が、時には人を救う時もあるんだから。例えば、落ち込んでる人に向かって、全然大丈夫じゃない状況だったとしても『大丈夫だよ』って励ましたりするでしょ。嘘の言葉が時には、絆創膏みたいになったりもするの。そう考えると、嘘まみれの言葉も、ある人にとっては、抱える価値のある言葉に変わったりすると思う」

僕の目を見て、彼女は問う。

「どう？　少しは、言葉を好きになれた？　物は言いようってね。言葉って、そんなに単純なもんじゃないよ。もっと複雑で、掴みにくいもの。だからこそ、私は、誰かの書く文字とか、誰かの声とか歌とか、この世に存在する全ての言葉が愛おしくてたまらない」

そう、彼女は言葉を愛していた、愛しすぎていた。三隅すみれは、異常なまでに言葉を好いていた。彼女はいわゆる本の虫。本に熱中するあまり食事を抜くことも多々あるほど。彼女に夢を尋ねれば、本に囲まれて暮らすことだと言う。本好きの模範解答みたいな答えである。彼女は、他人の書く文字そのものも好きである。サインというものに、すごく惹かれるタイプであるし、友達の書く字、先生の書く字、日常の中のありふれた文字が特に好きだった。その理由は、誰かが書いた文字は、その人そのものを写しているように感じるからだとか。とにかく彼女は言葉が好きだった。昔から、人の言った言葉は人一倍大事にするような人間だった。日常にあふれている声、文字、そんなものを単純に、純粋に好いていた。

「はい！　今日はここまで！　私は、相変わらず言葉が大好きなままなので、今日は私の勝ちね！」

彼女は満足げに、声を弾ませて言う。

「この勝負の終わりは、あくまで私が言葉の素晴らしさを教えられなくなったときだからね。私の言う反論は、学術的なお堅いものじゃないし、意味不明、理解不能なこともあるかもだけど、私が心から素晴らしいって思えるうちは、私の勝ちだから。そこんと

こ、忘れないでね！　じゃ、また！」

彼女は言いたいことだけ言って、雨の中をご機嫌そうに、僕のもとから去っていく。全くこの勝負、僕は圧倒的に不利なのだ。それでも、まだ負けてあげる気はない。僕は、まだ言葉が消えればいいと思っているから。あの日の涙は、まだ忘れていない。駅から家までの帰り道、15分にも満たない時間。はたから見たらきっと意味が分からない、でも僕たちにとってはとても重要なこの勝負。僕はまだ終わらせるわけにはいかない。

「言葉って、そんな重いもの？　お前はよく、人生を変えるとかなんとかいうけどさ、それって本当に言葉の力かよ？」

今日の僕の主張。じめじめした、梅雨特有の嫌な湿気が肌に纏わりつく。今日も雨である。彼女と会う時は、決まって雨の日だった。この勝負は、曜日も時間もバラバラで、彼女と駅で会った日にだけ行われる。今のところ、僕の全敗。彼女には一度たりとも勝てたことがない。それでも、僕は今日もめげずに、彼女に挑む。

「今日は、そう来たか！」

彼女は、楽し気に言葉を続ける。

「まあ一ね、言葉が人を変えたことを、明確な証拠を示して説明するのは難しいだろうね。でも、まあ、私は言葉が人を変え得るって信じてるわけだけど。言葉って、時にはすごく大きな力を与えてくれるって思うの」

そうやって、彼女は今日も、僕に向かって言葉の素晴らしさを説くのである。ここまでくると、僕は毎回、「言葉」宛ての彼女の恋文を長々と聞かされているような気さえする。「言葉は薬とかみたいに明確な効果なんか、何一つないじゃん。ましてや、ファンタジーの世界じゃないんだから、魔法みたいに何でもできる力も持っていないでしょ？」

まあ、僕も勝ち筋なんてこれっぽっちも見えていないのに、反論する元気はまだあるのだから、大概だ。

「うん、そうだね。言葉は決して魔法でも万能薬でもないよ。だけど、ほんのちょっと背中を押してくれたり、悲しみから救ってくれたりする。本なんかも、そう！」

「本？」

「そう。本ってさ、私すごく好きなんだよ。でも、何で好きかって聞かれたらよく分かんないの。でも、本って、すごくない？　私たちが、作者について知ってることってあんまりないでしょ？　顔も知らない人からもらった言葉なのに、私たちは涙を流したり、勇気をもったりする。それって、やっぱり、本にしかできないことだと思う」

彼女は青い傘をくるくる回しながら、ご機嫌に、言葉を並べてみせた。

「本を読む時って、余計な事なんかいらないんだよね。本当に文字だけの世界。これを書いた人がどんな人であるかとかは関係ないの。それが、本の良さの一つ。本の中の言葉は、いつだって平等に人に降り注ぐ。だけど、どの言葉がその人に響くかはそれぞれ

違うの。本当に不思議で、面白いよね」

前を見て話していた彼女が、僕のほうに視線を移したのが傘越しにも分かった。

「まあ、言葉の力っていうのは、ここで証明しろって言われても正直無理。だけど、そうだな……私は、これまでめちゃくちゃ本の中の言葉に助けられて生きてきたの。だから、今こうやって、案外落ち込みやすい私が、こうも楽しそうに話してること自体、何よりの証拠ってことでいい？」

「お前は、本がなかったら死んでた？」

僕は、聞く。

「うん、死んでたよ。多分、5回くらいは、確実に」

彼女は、笑みを浮かべて言った。はっきりと、迷わずに。

「もういいや、今日も負けてやる」

彼女の言うことは、正論とは程遠いのかもしれない。それでも、彼女が納得できる答えに辿り着いてしまった時点で、僕の負けなのだ。

「ふふっ、ありがと」

彼女は、またくるくる傘を回しながら、言葉を紡ぐ。

「私、本の魅力なら何時間でも語れる自信あるの。でも、本当に何でそこまで好きなのかは分かんない。だって、本の代わりになりそうなものっていっぱいあるけど、その中でも何で本なのかって聞かれたら、納得できるような答えは多分返せないもの。だけど、それでいいんだって思うようにしてる」

「理由は、これから見つけていけばいいって話？」

「違うよ。理由なんかむしろない方がいいって話。理由がない好きの方が、案外最強だったりするの」

「どういうこと？」

「だって、なんか好きっていうのは、誰かから論破されにくいからね。好きな理由なんて誰にも、理解されなくていいの。明確な理由がある方が、色々反論できる余地が生まれちゃうでしょ？」

「まあ、確かに」

彼女が歩みを止める。雨の音がやけに大きく聞こえた。彼女が再び口を開く。

「言葉も同じ。言葉が好きなことに、明確な理由なんてないんだよ。だから、そろそろ降参したら？」

そう言った彼女の顔は、傘に隠れて見えない。

「しないよ。まだ、諦めるつもりない」

僕は、迷わず、はっきり言う。彼女の方を向いて。

「そっか。まあ、いいんだけどね。勝つの楽しいし。じゃ、またね！」

僕とは一度も目を合わさずに、彼女は歩き出した。

「降参か。降参なんかしたら……」

そこまで口にして、考えるのをやめた。彼女は本当に矛盾だらけだ。雨の中、一人取り残された僕も、そろそろ家に帰らなくてはならない。

「とりあえず今日は、全部の言葉を消すことは諦めることにする。そこで、提案です。『死』とかそういう人を傷つける可能性が高い言葉はいらないんじゃない？」

今日の僕の主張。いつもと少し変えたつもりである。相変わらずの雨模様。変わり映えのしない天気。僕の主張の仕方ぐらいいは変えていきたい。

「人を傷つける？」

彼女は聞き返す。

「そう。『死ね』とか『殺す』とかそういう言葉って本当に必要？ それぐらいいは、この世から消えてもいい言葉なんじゃない？」

「うーん、まあ、言ってることは分かるけど、本当に不必要？」

「お前がいうように、人の人生を変えちゃうような力が言葉にあるとしたら、それってプラスな力だけじゃないだろ。マイナスなこともある」

今日の僕はいつもと少し違う。あれから何回こんなことをしているのだろう。7、8回は超えた気がする。それでも、僕はまだ一回も勝てたことがない。少しの焦り、怖さ。

「マイナス？」

彼女が、聞き返す。

「そう、マイナス。例えば、人を死に導いちゃうような言葉だってあるだろ？」

踏み込みすぎな気もした。それでも止まれなかったし、止まる気もない。

「例えば、『死ね』とか『殺す』とか？」

「そう」

それらの言葉を口にする彼女からは、目を逸らしたくなる。

「 unnecessary 言葉って、この世界にはないと思うけど？」

「それでも、お前に必要ない、お前が大事に抱える必要のない言葉っていうのはあると思うけど？」

一瞬の沈黙。そして、

「驚いた！　今日はちょっと違いますな。まあ、この勝負は、私次第だもんね。なかなか良いところ突いてきたんじゃない？」

「それで、何か反論ある？」

僕は聞く。このまま、彼女が黙ってしまえばいいと願いながら。

「うーん、確かに、あんまり良い言葉だとは思わないけど……でもさ、消えてほしいと思ったこともないよ」

「何で？」

「だって、『死』なんて言葉は、やっぱり必要じゃない？　私、『死語』って言葉は案外好きだしね」

ああ、また彼女は納得のいく答えに辿り着いてしまう。

『死語』って素敵な言葉だと思う。使われなくなった言葉をさ、死にゆく言葉と捉えた人って、なかなかロマンチストだと思わない？　この言葉を生み出した人は、天才だと思うね！　言葉さえも死んでしまうという無常さ、死にゆく言葉に対する哀愁さえも感じるね！『殺』って字も、『殺風景』とかはいい表現なんじゃない？　まあ、だから、私は一文字たりとも消えてほしい字なんてないよ。物は言いようって言ったじゃん」

彼女の声は明るい。いつだって、明るい。でも、僕は怖い。

「ねえ、そろそろ諦めたら？　いい加減分かてるくせに。こんな勝負、どう頑張ったって、私の勝ちになっちゃうでしょ。そもそも、勝ちの基準自体が間違いなんだもん。こんな勝負、本当は成り立ってないの。分かてるでしょ？」

そう、彼女は問う。分かっていた。だからこそ、怖かった。彼女がいつかこんな茶番に飽きてやめてしまうこと、それが僕は怖かった。

「まだ、続ける」

「意地っぱり！ さっさと認めればいいじゃん、本当は言葉なんか消えちゃえばいいなんて思っていないくせに」

彼女が、少し声を荒げる。彼女の顔は依然として、傘に隠れたまま。

「それでも、絶対認めてなんかやらない。降参なんかしない。でないと……」

僕の声もまた、少し棘を含んでいた。雨音だけは、いつも通り。

「でないと、」

「でないと、私が死にたいって思うから？」

彼女が、僕の方を見て言う。向きを変えた傘から、僕の方へ水滴が飛ぶ。やっと見えた彼女の目が、そのどこか悲しさを滲ませた目が、あの日の彼女と重なった。

その日は、梅雨入りしたというだけあって案の定雨が降っていた。最寄りの無人駅は、いつ見ても古臭く、これぞ田舎の駅という感じ。降りる人もあまりいない。だからこそ、僕は彼女を見つけられたのだ。駅の出入り口に、佇む人影を見たとき、彼女だと気付いた。三隅すみれとは、幼稚園から小、中と一緒に、幼いころはよく近所の神社で遊んでいた。高校進学と同時に彼女とは、まるっきり会わなくなってしまったが、後ろ姿だけでなんとなく彼女と分かったのは、やはり幼馴染だからなのだろうか。僕は、彼女とはそれなりに親しい間柄であると自負していたし、彼女が人見知りのくせに仲の良い人と絡むのは案外大好きなことも当然のように知っていた。だからあの日、一人で立っていた彼女に声をかけようとしたことも、僕にとっては何も迷うべきことではなかった。まして、傘もささずに駅から飛び出してしまった彼女を見て、運よく折り畳み傘とビニール傘、両方持っていた僕は、どっちかを貸してやろうという気でさえいた。

「すみれ、すみれ！ 傘忘れたんだろ？ 僕は神様みたいに優しい心を持ってる人間だし、2本あるから貸してやるよ。ほらっ！」

雨の中に、傘なしで飛び出していった彼女を追いかけ、そう彼女の背中に声をかけた。冗談交じりにかけた言葉は、いつも軽口を叩いて言い合っていた僕たちにとっては、当たり前と言ってもいい。久しぶりに、僕らのいつも通りが始まるはずだった。彼女が振り返って、いつも通り嫌そうな顔をしながらも、会えた嬉しさを滲ませていたなら。

「ははっ、私って本当運悪いんだから。なんで、誰にも会いたくない時に、久しぶりに紬なんかと会っちゃうんだろ」

そうやって、彼女が振り返る。彼女の頬には、雨に混じって涙が伝っていた。

「おまっ、何で、泣いて……」

僕は明らかに混乱していた。彼女は見かけによらず我慢強く、人前で泣いているところはほとんど見たことがない。小学校、中学校の卒業式の日、体育館を出るまで必死に泣くのを我慢していた彼女を知っている。それなのに、久しぶりに会った大学生のすみれは泣いていた。それだけで、いつもとは違うすみれだった。さらにすみれは、僕の知っているすみれなら絶対に言わないことまでも口にする。

「死んじやいたいって思ったの」

ぼつり。言葉が落ちる。彼女の口から、あまりにも頼りなく、消えてしまいそうな言葉が、落ちる。

いつも遊んでいた神社で雨宿りをしつつ、僕は彼女の言葉に一生懸命耳を傾けた。
「別にさ、いじめられてるとか、そういうんじゃないの。ただ、たまたま目に入った言葉にさ、何でもかめちゃくちゃ傷ついて、涙が出るくらい悲しくなって、死んじやいたいなって思っただけ」

彼女は、地面に視線を固定しながら話す。淡々と、他人事のように語る。

「めっちゃくちゃ懂れてる人がね、あっ、歌手なんだけど。考え方が私と真逆でさ、だからこそ、私にとってはすごく大事な言葉を、さりげなく送ってくれるような人なんだよ。でも、その人の何気ない発言でさ、ちょっと些細なことでさ、炎上しちゃって、色んなコメントが書き込まれたりするわけだけど、その中にさ、『死ね』なんて言葉がごろごろ転がってるわけ。そういうの見たらさ、何かダメになっちゃった。その人自身はそこまで気にしてなさそうなのにね。私がダメだったの」

すみれの言うことを、分かりたいと思う。分かってやりたいと思う。だけど、どうしても、分からなかった。だって、それではまるで、

「他の人に向けられた言葉を見て、死にたいって思ったの。やっぱり可哀しい？」

彼女は口元に笑みを浮かべながら僕に問うけれど、やっと合った目は笑ってなんかなかった、悲しさが滲んだままだった。僕は、その問いに答えられない。言葉としては理解できても、その言葉の意味を簡単には受け入れられなかった。彼女が「死にたい」なんて言葉を、簡単に口に出す人間ではないと知っている。昔彼女自身が、そういう言葉は冗談でも口にしてはいけないと言っていた。声に出して、本当にでもなったら怖いからと。そんな彼女が、「死にたい」なんて口にする理由が、言ってしまうえば他人事で済むような、ましてや他人に向けられた言葉だなんて。僕にとっては、受け入れがたいことだった。

「言葉なんか、世界から全部消えちゃえばいいのに」

ふと、思わず零れ落ちた言葉だった。

「そんな言葉、私の前で言ったってことは、それ相応の覚悟があるってことだよな？」

彼女は先ほどとは打って変わって、はっきりと言う。

「言葉がいかに必要か、いかに素晴らしいか、私が教えてあげる」

そんなことを、彼女は言う。ああ、そうか。彼女は、すみれは、昔から、本棚が倒れて下敷きになって死ぬのが理想だと言っていた。これこそまさに、本に囲まれて死ぬものの、言葉に溺れて死ぬそのものだ。僕は、異常なまでに言葉を愛す彼女のことも知っていた。好きな本、文字、声、言葉、それらについて語るとき、彼女がいかに眩しく輝くか、僕は知っていた。そんな彼女が、たまらなく好きだった。

「それでもなお、言葉が消えることを願ったとしたら？」

「うーん、そうだな、そんなことは絶対ないと思うけど。でも、万が一そんなことが起きたら、そしたら、私は、たかが言葉ごときで、死んじゃいたいって思うのをやめる」

そう、彼女は言ったから。僕は、死にたいと思っている彼女を放っては置けなかった。僕自身の我儘だろうと、彼女には僕の知るすみれのまま、いつも通りのすみれのままでいてほしかった。

「人に向けられた言葉を聞いて死んじゃいたいって思うのって、そんなダメ？」

あの日と同じ近所の神社で、僕は再び彼女の話に耳を傾ける。彼女の口から、言葉が溢れる。

「人に向けられた言葉を聞いて死んじゃいたいって思うのってそんなに可笑しいことなの？ 私って変なのかな？ 馬鹿なのかな？ でもっ、どうしようもなく悲しくなって、簡単に、乱雑に、ポンって置かれた言葉に、投げ捨てられた言葉に、何でそんなことできるんだろうって思って、そんなに、そんなに言葉って、使い捨てみたいに使っていいもの何だっけって思って、勝手に置き去りにされた言葉がすごく可哀想で、寂しそうで、救ってほしそうで、そんな言葉でいっぱいこの世界にすごく腹が立って、私の価値観とかも否定された気がして、崩れてく気がして、こんな世界とは一生分かり合えないと思って、分かりたくもなくて、こんな世界捨ててやるって思って、思って……そんなこと思う私の方が、いちいちこんなことで大ダメージ食らってる私の方が、この世界に受け入れられてない気もして、どうしようもなく悲しくなって、心がどうしようもなくなっちゃって、耐えらんなくなっちゃって、生きていけそうにないって思っちゃって、辛くなるから、寂しくなるから、何の涙かもわかってないのに……止め方も分かんないから、だから、消えちゃったら、いなくなれたら、その……だから……だから、死んじゃいたいって思って、思っちゃって、……ははっ、支離滅裂、何言ってるんだろ、でも……どうしたら、……っ」

彼女は必死に言葉を吐き出していた。必死にかけらを集めては、繋げようとしていた。僕に伝えようと。きっと彼女自身も理解できていないことを、言葉にして、声に出して伝えようとしていた。

「本当はね、人は簡単に死ねないことも知ってるの。自分が本当は臆病で意気地なしだから、実際に死ぬ勇気なんか持ってないことも知ってる。本当は、いちいちどうでもいい言葉なんか刺されたくない、ちゃんと自分の中で盾を作っとかなきゃとも思ってる。それでも、気分が沈んでる日に、そういう誰かが投げたまんまにしちゃった言葉をみると、私は多分また、死んじやいたいって思うの」

そう、彼女は口にした。一瞬の沈黙。その間に、僕ができることを考える。きっと、僕ができることなんかないということも知りながら。それでも、そんなことを彼女が言うのなら、僕は考える。考えて、決める。今の僕ができる、気休め程度のことを。

彼女がそんなことを言うのなら、だったら、僕は嘘をつく、精一杯の嘘をつく。一生分知らないふりをする。

「やっぱり、すみれの言いたいことは何一つ分かんない！ 分かってなんかやれない！

どれだけ考えても、他人に向けられた言葉はそんな死にたくなるほど、重いものだと思わないし、死んじやいたくなるくらいなら、言葉なんかこの世界から消えてもいいって今でも思ってる。だから、お前が死んじやいたいって思うたび、僕は否定し続けてやる。たかが言葉だろうって鼻で笑って、お前の人生揺るがすほど、重いわけないって、教え続けてやる」

彼女が言葉を愛す限り、僕は言葉を否定し続ける。言葉の無意味さを彼女に教え続ける、訴え続ける。嘘、嘘である。いつか、僕は彼女の傍を離れるかもしれない、言葉を否定することをやめてしまうかもしれない。でも、ただ一つ、たった一つ、僕が心の底から、嘘ではなく、約束するとしたら。例え嘘でも、さっき彼女に向って投げた言葉は、忘れないでおこうと思う。投げ捨てたりせず、置き去りにしたりせず、自分のもとから離さず、ただずっと自分が放った言葉の行く先を見守ろうと思う。たとえその言葉の先が、本当の嘘になってしまったとしても。そうなったら、今度は罪悪感とともにその言葉を自分のもとに置いておく。多分、きっと、そういうことだから。彼女が言いたかったことは、そういうことだから。

「ははっ、ふふ、気持ちになんか晴れた気がする」

彼女は笑う。昔から変わらない笑い声。すみれが笑ったのを久しぶりに見た気がした。「なーんて、嘘。一瞬だけ、ちょっと晴れ間になっただけ。だけど、それでいいや。今は、それでいいや」

彼女は、きっと、僕の嘘にまみれた言葉も大事に抱え、愛すのだろう。きっとそれは、彼女以外、まあ、僕ら以外には理解できない話、理解しなくていい話。

一瞬の晴れ間。晴れ間とは、降っていた雪や雨などが一時的にやんでいる間のこと。また、心が晴れている間のこと、らしい。見上げれば、薄暗い雲の隙間から僅かに青が、顔を覗かせている。そういえば、今朝のニュースで言っていた。ようやく梅雨が明けるらしい。

後翅/木戸みお

後翅/木戸みお

こうし
後翅

木戸みお

弱々しい灯りで部屋の中を照らしていた蛍光灯が、ちらちらと明滅し始めた。私の中からまた一つ剥がれ落ちて行く。フローリングに直に敷かれたマットレスの上に座り込むと、一瞬眩暈がした。

「ああ、蛍光灯切れちゃったんだね」

玄関が開く音がした後、部屋に入って来たのは井坂だった。

「うん」

軽く返事をして、私は両の足をこすり合わせる。立ち上がる気にはなれなかった。こういう風に寒を感じる時は、いつも裸足の指が一番冷たくなっている。私は壁にもたれかかるようにして、自分の身体を両腕で抱いた。彼はそんな私の様子を気にも留めず、レジ袋の中から蛍光灯の替えを取り出してテーブルに上った。袋の中には他にも長ネギや木綿豆腐なんかが入っていた。

「怖いからグラスだけ片付けといて」

うずくまっている私の方を振り返って、彼はそう言う。私は床を這うようにしてテーブルまで近づくと、二人分のグラスを端にどかした。そして何となくテーブルの上の井坂を見上げる。顎下の髭の剃り跡がぼつぼつと赤くなっている。

灯りが完全に消えると、部屋は真っ暗になった。テレビつけていいよ、と古い蛍光灯を取り外しながら井坂が言ったから、私は転がっていたリモコンを拾い上げボタンを押した。明るくなった画面にたくさんの人が写し出される。しんと静まり返っていた部屋に人の声が響き渡る。

「ねーミツミ、恋愛をするのに捨てなきゃいけないものって何だと思う？」

井坂が、何の脈略もなく問いかけて来た。私は、正常な羞恥心、と大真面目に答えてマットレスの上に戻った。彼はなぜかゲラゲラと声を上げて笑った。そしてまた、私の中から剥がれ落ちる。ぱりぱりと音を立てて崩れて行く。

「先生」

そう私を呼ぶ。先生じゃないよ、と何度も何度も訂正したのに、やっぱり先生と呼ぶ。私という人間を定義付ける言葉が、それしかない信じ切っているかのように。

井坂の家で季節外れの鍋を食べて、そのままリビングで眠った、次の日の早朝だった。私は過去のアルバイト先を通して連絡が来た、一つの呼び出しに応じるためサンダルと上着一枚で外に出て来ていた。井坂は多分、起きて私がいけないことに気付いても驚きはしないだろう。

遠くで始発の電車が走り去って行く音がする。初夏とはいえ朝方だから肌寒い。けれどそれくらいの方が良い。鮮烈な日差しに照らされるよりも、穏やかな冷氣の中にいた方が、私は安心出来る。

「だから、先生じゃないんだよ。私は事務のバイトなんだから。もうそれも辞めたんだし」
見慣れない姿になった祐が、すぐそこにいる。非現実的な感覚だった。

公園のベンチから立ち上がった彼に近づきながら、かつて何度も口にしたような言葉を口にしながら、私は確かに戸惑っていた。

「中学受験合格したんだから、お世話になった人みんなに挨拶しに行きなさいって。田舎のおばあちゃんが」

そう言って、白い歯を見せて笑った。その表情は変わっていない。彼の最たる特徴である、歪んだ輪郭を持つ頭は、髪が伸びたせいでよく見えなくなっていた。

「ねえ、僕、弟がいいな。妹は嫌だ。知ってる？ 男の子の方が優しいんだよ」

多分、二年以上前だ。私が事務の仕事をしていて、祐がその生徒だったとき。

エントランス横の休憩室で、祐はいつも遅くまで課題をやっていた。そしてとても良く喋った。他の生徒が軒並み帰ったような時間帯に、彼と塾の鍵を託されていた私はしばしば二人になる。彼は私が黙り込んでいてもお構いなしに話し掛けて来た。

「お母さんはさ、男の子にしようって思って男の子産んだり出来ないのかなあ」

母親が妊娠している訳でもないのに、その頃の祐の話題はそういう内容ばかりだった。彼は兄弟が欲しかったらしい。

「無理だよ、そんなの」

私は休憩室の出入り口である扉に寄りかかりながら、あまり深く考えずに彼の言葉に返事をする。扉の小さな窓からは、電気がほとんど消えた薄暗いエントランスと、観葉植物の脇に立っている男女の姿が見える。女の方は、はっとするほど美人で、とても子

供がいるようには見えなかった。小柄で、わざとらしく真っ黒な髪で、半端にスカートが長い。男の方は女よりも二十は上に見える。

「先生は弟か妹いるの？」

祐が顔を上げて私に問いかけて来た。先生、という言葉だけが身体の半ばあたりで引っ掛かる。

「先生じゃないよ」

何回目か分からない指摘をすると、祐は露骨に嫌そうな顔をした。この部屋で一緒に過ごした時間の割に大して仲良くはない私たちだったが、ここまであからさまな反応をされるとは思っていなかった。

「それと、弟も妹もない」

私がそう付け加えると、祐はへえ、とだけ言ってランドセルから別のドリルを取り出し始めた。やはり期待した返答ではなかったらしい。私は祐の少し歪んだ形の坊主頭を眺めた後、再び小窓の外に視線を移す。男女の姿は依然そこにある。男が女の方に手を伸ばし、その後頭部を包み込むように掌を当てた。そして垂直に伸びた美しい髪を乱して、自分の方に引き寄せる。

「ねえ、お母さんまだ？」

がりがりと小型の鉛筆削りの音を立てながら、祐は小窓の外を見ている私の背に向かって問いかけた。祐は他のどの生徒よりも遅くまで塾に残り、この休憩室で待たされている。母親の迎えが遅いから。

「ねえ、先生、聞いてる？」

私はしばらく黙っていた。エントランスの男が、身を少しかがめて女の鼻梁の辺りに口付ける。女の白い腕が伸びて絡みつく。人間の姿は二つ重なって、その身体に落ちる影をより複雑にした。それは酷くアンバランスな彫刻のようで、痛ましい何らかの骸のようで、どうにも落ち着かない。女の方は宗教画の中の少女のようにほっそりとしていて、とてもその身体を以て祐を産み落としたようには見えなかった。エントランスの電気が一つ消える。ちょうど八時になったらしかった。

「分からない」

あれが祐の父親ではないということを除けば、私には何も分からないのだと思う。

「ええ、分からないって何だよ」

祐は私の呟きに対して一人で怒っている。彼はまだ子供だ。だからこそ、こうやって色々なものに怒ることが出来るのだろう。本当に何も分かっていないのは自分なのに。

白い腕がゆっくりと離れて行った。長いようで短かった。それ以上のことは何も起こらなかった。しばらくすると、男の方は一人で帰って行った。エントランスには祐の母

親だけが残った。

部屋のソファに座っている祐は、分からない、という私の言葉が余程嫌だったらしく、ずっと文句を言い続けている。分からないって言ったら駄目なんだよ、すごく自分勝手な言葉だって、担任の先生だって言ってたよ、と。この子はどうしても良いようなことばかり喋る。それらは本当の意味で無責任な、罪のない言葉だった。

私はそんな彼の言葉に丁寧に相槌を打ったり、そうだね、と返してみたりした後で、何の脈絡もなく、赤ちゃんってキャベツ畑から来るんだよと言ってみた。祐は一瞬怪訝そうな顔をしたけれど、そうなんだ、とだけ返した。想像以上に反応が薄くて張り合いがなかったから、私は素直にお母さん来たよ、と告げてやった。

「先生にも一応お礼言わないと、って思ったから」

私がぼんやりと昔のことを思い出している間も、祐は休むことなく喋り続けていた。名門中学に合格したこと、勉強が忙しくて部活をやらせてもらえなさそうなこと、数か月前に塾に泥棒が入って窓ガラスが割られたこと。昔のように、自身の興味の範疇にあることを手当たり次第話した。けれど、弟が欲しいとは言わなくなっていた。

「だから、先生じゃない」

私はそれくらいしか返す言葉がなかった。周囲に人の姿はない。こんなにも開けた場所で、私はこの小さな少年と二人きりだった。足元に蟻の行列が出来ている。祐はそれに気が付くと、興味深そうに地べたをまじまじと眺め始める。そしてその内の一匹がカラフルな砂糖菓子の破片を持っているのを見て、これ知ってる、食べたことあるもん、とやけに大きな声で言った。

少なくとも私にとっては、あらゆることが、少しずつ不可解だった。十二年という曖昧な年月を重ねた祐の身体は、それでもなお、何の負い目もなく朝の日差しを受けている。

私が先生という呼び名を度々否定するから、祐は、なら名前教えてよ、と言って来た。そのとき初めて、彼が私の名前を知らないのだということに気付いた。

「ミツミ。下の名前はね」

私がそう答えると、祐は、何だか変な名前だね、と言った。

その後も、私はしばらく彼の話聞いた。名前教えてよ、と言って来たのにも関わらず、結局私の呼び名は先生、から変わることはなかった。十時を告げるチャイムが鳴ると、彼は塾があるからとだけ言ってベンチから跳ねるように立ち上がり、じゃあね、と手を振ってバス停の方に走って行った。私はそのなだらかな背中と、二年前と変わらない真っ直ぐに伸びた手足を眺めて、ほんの少し憎たらしかった。祐は真昼の通行人の群れに吸い込まれて行った。その姿は一瞬で見えなくなった。

彼を見送ってから井坂の家に戻ると、時刻は既に正午を過ぎていた。空は晴れ渡っていて、日差しが強かったから、ずっと下を向いて歩いた。二階建てのアパートの階段を上り、部屋のドアを開けると、井坂はフローリングの上に寝転がったまま帰って来た私を出迎えた。そして、顎で机の上の小皿を指し示し、食べて良いよ、と言った。

「何これ？」

「いちごでしょ、どう見ても」

少し黄ばんだ小皿の上には、ヘタが付いたままのイチゴが大量に盛られていて、こぼれ落ちそうになっていた。多分、井坂の実家の両親が送って寄越したものなのだろう。

「ミツミ、どこ行ってたの？」

「公園」

私はその内の一つを手にとって、先端にかじり付いた。日の当たる所に置いてあったから、生温い。

「そう」

井坂はそれ以上は聞いて来なかった。何しに行ったの、とも、どうして何も言わずに出て行ったの、とも。彼はそういう人だ。

それからは、全ていつも通りだった。祐が私に対してよく喋ったように、私も井坂に色々なことを話した。彼は私が何を言っても真っ向から否定して来ることはない。

だから私は、井坂と一緒にいるときは喋り過ぎてしまうことがある。自分でも気づかない内に、酷く脆い部分まで、ぽっとさらけ出してしまいそうになる。

「大丈夫だよ」

そういうとき、井坂はしばしばそう言う。その大丈夫、には恐らく私を安心させようとする意図が込められているのだと思う。大丈夫、大丈夫、と子供に言い聞かせるみたいに繰り返して。

「だって、ミツミは女の子じゃん」

そして最後には、決まってそう言った。私たちの会話はいつもそれで終わった。

ほんの少し開けられた窓から風が入り込んで、薄いカーテンを揺らしていた。どこからかクラクションの音が聞こえる。ずっと止まない。辺りは大分暗くなっていた。私は風呂上がりの濡れた髪を乾かしながら、外から入り込んで来る冷気に触れるように鼻先を突き出してみる。ほんの少しだけれど涼しい。

私の後ろにいる井坂は、ヘッドフォンを付けてずっとテレビゲームをしていた。骨ばっ

た輪郭と尖った髪を押さえつけるためにあるヘッドフォンみたいだ、と漠然と思う。それに、体格の良い井坂が背を丸めて胡坐をかいていると何だか少し不自然だ。

髪を乾かし終わった私は、ドライヤーを片付けると井坂の背にもたれかかるようにして、カーペットの上に座った。そして祐のことを思い出した。彼の、細く伸びた恐ろしく清潔な脚を思い浮かべていた。

十二歳になっても子供みたいな^{なり}形をしている祐とは違って、私は十歳のときには既に身長百六十センチを超えていた。クラスで一番背が高くて発育が早かった。だからいつまでも子供のままではいられなかった。

「高校生くらいかと思ったよ。すごく大人っぽいから」

私が小学四年生のとき、教育実習に来ていたその男の人は、帰りの会の後で私に言った。クラスの女の子たちが言っていたように、美形で背の高い人だった。

「教育学部なんだよ。先生になるために勉強してる」

皆が帰った後のがらんどうの教室で、その人はランドセルを背負った私に語り掛けた。彼の言葉は例外なく全てが優しくて、体のどこにもつかからずにとんと落ちて行くような響きがあった。

「ミツミさんは物静かだね。人と話すの好きじゃない？」

彼の声が私の中で再生されるとき、それは一番に虚無感を伴った。彼は確かに私の心に引っかき傷を残していったけれど、そこには多分、何の悪意も嘘もなかったから。

いつも通りの放課後の教室だった。私の頭を撫でた後で、私の服の中に手を入れ、その人は泣いていた。その涙があまりに綺麗だったから、なぜこの人は泣いているのだろうという当然の疑問がそのときは浮かんで来なかったのだ。ごめんね、ごめんね、とずっと繰り返していたけれど、それが何に対してのごめんねだったのかは、誰も教えてくれなかった。

脱がされた私の靴下が、くしゅくしゅに丸められて床の上を転がる。壊れもののよう
に扱われ、机の上に寄せられた後、私の裸足は行き場を失った。

窓の外から、子供たちの声が聞こえる。カラスの音が聞こえる。踏切の遮断機の音が聞こえる。それらが、どんどん遠ざかって行く。

その人は私の足を筋張った手で握って、しばらくの間ひざまずいていた。私は自身の身体を両の腕で抱くようにしてひたすらじっとしていた。裸足の指は確かに誰かの吐息を感じ取った。そしてその熱をいつまでも匿った。

しばらくの沈黙の後、私が絞り出した言葉は、先生、だった。私はその人を指し示す言葉をそれしか知らなかったのだ。

「井坂、私ね、多分すごく強いんだ」

私は思い切り指を伸ばし、自分の手を蛍光灯にかざしてみた。何も見えなかった。指の隙間が眩しいだけだった。

「へえ」

ゲームを終えた井坂は、右手でスマートフォンをいじりながら、空いたもう一方の手で何らかの義務を果たすかのように私の頭を撫でている。最初はぶっきらぼうだった手つきが、何かに勘付いたかのように、途中からとても優しく、穏やかなものになる。

彼は多分、私の言葉なんかろくに聞いていなかった。ただただ終わらせようとしていた。私の口からあふれ出て来る不可解な言葉を止めて、私たちの関係を正しく存続させる。あらゆることに対して、本当に真面目な人だ。

井坂がずっと持っていたスマートフォンを枕元に置いた。そして私のほうに向き直って、何かの合図のように、ミツミ、と口にした。

私たちのクラスの教育実習生は、週明けの月曜日にはいなくなっていた。クラスの子たちの反応は様々だった。露骨に残念がる子もいれば、大して気にも留めていないような子もいた。私はその教室で女の子たちのグループに混ざりながら、彼女たちの言葉に賛同の相槌を打った。そんなことをしている内に一週間が過ぎ、次の月曜日を迎える頃にはクラスの話話は当然のように移り変わっていた。誰もあの人のことのことなんか、口にしていなかった。

「ミツミちゃん、橋本先生と喧嘩したんでしょ」

だからこそあの子の言葉が記憶に残ったのだろうか、と時折考える。けれど多分、その限りではないのだと思う。

その女の子とは、同じクラスというだけで話したことがなかった。長い髪を低い位置で一まとめにして、分厚いレンズの眼鏡を掛けていた。初めて聞いた彼女の声は、私のことを責め立てるように、確かに怒気を孕んでいた。ミツミちゃんのせいで橋本先生いなくなっちゃったんでしょ、とでも続けそうな勢いで。

「喧嘩？」

その時、私ははっとした。この子は私と彼の間にあったおぞましいこと、どうしようもないことの数々を知らないのだと。

「違うよ」

そう否定した後、続ける言葉が見つからなかった。彼女に何と言えば良いのかが分からなかった。

彼が何をしたのか。私が何をされたのか。この子は、それを理解出来ない。この子はま

だ子供だから。もやがかかったような頭の中で、その事実だけが鮮明に私に迫っていた。
「大丈夫？ ミツミさん」

それからしばらく後だった。昼休みの校庭で一人でいた私に、話し掛けて来た人がいた。横から突然声がした、ただそれだけのことなのに、その瞬間私の体は不自然な位に跳ね上がり、おぞましい量の冷や汗が体を伝った。

すぐ横に座っていたのは、隣のクラスの男の先生だった。ほんの少しの気まずさを孕み、けれども確かな良心に後押しされた声で彼は私に問いかけていた。

その言葉に答えるまでに、私は時間を要した。この人は何をどこまで知っているのだろう、この人は私をどう見ているのだろう、色々なことが一瞬の内に頭を駆け巡って、その後で私の身体は途端に熱を持つ。あの人が触れたよりもずっと奥で何かが動いて、生温いものが下りて来る。気持ち悪かった。

「あ……」

「うん？」

見透かされてしまうのが怖かった。私がこんな人間になってしまったことを、知られなくなかったのだ。

横にいるその人は、私の言葉をひたすらに待っていたんだと思う。ずっと先、木陰から遠く離れた場所では、子供たちがドッジボールをしている。動的な風景だ。対する私はずっとここで止まっていて、多分これからずっとそうで、その風景の一部になることはない。

私は結局、その人の目を見ることが出来なかった。彼はきっと、何の疑いもなく善良な人の目をしているのだろう。だから私は、また絶望する。嫌というほどに醜くなってしまった自らの心の所在を、知ることになる。

お前はこの男が真横に来たとき、真っ先に何を考えたの。誰かがそう問うような気がした。そうやって、恥にまみれた私の心身を、日のあたる場所に引きずり出す。今日も明るくて暑い。焼けるように日差しが強い。眩しくてたまらない。

私は窓から射す日の光で目を覚ますと、脱ぎ捨ててあった服を頭から被り、特に理由もなく部屋をぐると一周した。井坂はいなかった。財布だけなくなっているから、おそらくコンビニにでも行ったのだろう。

綺麗に掃除されている廊下を歩いて玄関まで行き、井坂が開けっ放しにしていた鍵を中から締めた。そして居間に戻り、同じように彼が開けたのであろうカーテンを引き、部屋が暗く静かになった後で、再びマットレスの上に戻った。マットレスからは、土の深い所のような匂いがする。これが、井坂の匂いなのか、部屋に染み付いている匂いなのかは良く分からない。

私は寝ころんだまま、しばらく一人で考え込んだ。じんじんと痛む頭を抱えて、諦めるように目を閉じる。様々なことが、記憶としての形を持たないまま、ただただ切り取

られた風景として蘇って来た。それらの風景は私にとって無感動な、そもそも感情が入り込む余地などないものだ。静かに受容されていて、もう形を変えることはない。

その中で不意に浮かび上がって来るのは、祐の、幼い顔だった。私は途端、どうしようもない気持ちになる。誰にも触られたことがない所を抉られたような感覚。痛みではない。そしてそれはもはや、曖昧な感覚でもない。

憎たらしかった。私はずっと祐のことが嫌いだった。何も知らずに母親を待ち、兄弟が欲しいと言う彼の存在が不快でたまらなかった。十二歳になってもまだ無邪気に喋り続けているのが許せなかった。嫌い、大嫌い、あんな小さな身体に投げかけるには、あまりに残酷な言葉。しかし私はもう、それを口にするに躊躇いを覚えないだろう。

依然として頭は痛くて、身体はぼんやりと熱い。カーテンの隙間から射すわずかな日の光が、足先を浸食しようとしている。私は静かな決心をして、重いまぶたを上げた。

丸時計が、午後七時を示した。

私は二年ぶりに、あの小部屋にいた。辺りはしんと静まり返っている。祐もすぐそこにいた。簡単に触れてしまうくらい、すぐそこに。

私が勤めていたその塾は、当時から何も変わっていないらしかった。恰幅の良い塾長は、突然連絡を寄越した私を笑顔で出迎えて、助かるよ、と言った。最近の新人さんはすぐ辞めちゃうからね、と。

スーツを着るのは二年ぶりだった。クローゼットの奥で眠っていたそれを取り出したとき、スコップの角みたいに尖った肩口に、私は多少の嫌悪感を覚えた。けれど、湿る肌をブラウスで覆って、虫の抜け殻のように丸められ放置されていたストッキングを履いてしまうと、私は何の問題もなく世間の女性たちの一部になった。結局そういうことだった。

そうして私は、再びここに来た。

祐は眠っている。言葉を持たない生きもののように、無口なまま、そこで眠り込んでいる。部屋に入ったとき、一番に目に入ってきたのはソファの上に横たわるその姿だった。彼が寝ている所を見るのは、多分、初めてだと思う。不自然に明るい部屋の中で、その身体には一切の影が落ちていなかった。

十代前半特有の、筋肉も脂肪もない棒のような脚が、座面に真っ直ぐ据えられている。裸足だった。丸められた靴下が二つ並んだスニーカーに詰められていた。足の指は小さくて丸く、取って付けたように不自然だった。

私は向かいのソファに座って、しばらくじっとしていた。あらゆるものに覆われた太腿の間、真っ黒なスカートの布はどこまでも深く落ち窪む。私は閉じた唇の裏で、同じ言葉を繰り返す。きっと、楽になれる。そうに違いない。

私は祐とは違った。人よりも早く大人になった。あの人が私の身体に触れたとき、私は十歳だった。初潮だって十歳のときだった。母も、先生も、井坂も、私の人生に対して何の責任も負ってくれなかったから、私は口を噤んだまま大人になったのだ。

子供の時間が永遠でないという衝撃を味わうときが、こんな祐にもいつか訪れるのだろうか、ふと思う。大人にならなければいけないということ。私たちはプラナリアでもアメーバでもないということ。清潔なままではいられないということ。そういう冷たい事実を、祐に教える人が現れるのだろうか。

私は顔を上げて、蛍光灯の光に目を細めた。

もし私がそんなことをしたら、彼は地の底に引きずり下ろされたような衝撃を味わうことになるだろう。そしてもう二度と、子供に戻ることは出来ない。同い歳の子供たちの輪の中に駆け寄って行くことは出来なくなる。そして本当の大人になってからも、その恥を抱え込んで生きて行く。

私と同じように、どこにも行けないようにしてやる。そんな欲望が、腹の底からあぶくのように浮かび上がって来た。私は立ち上がっていた。深く、深く傷つけて、無理矢理大人にしてしまう。私には、それが出来る。

気持ち悪いことなんて、何もなければよかった。本当に恥ずかしいことなんて一生知らなければよかった。そういう風に思っていた。過敏で残酷な思春期を抜けて、誰よりも確かな痛みを伴って大人になったから、いつまでもこのままなのだろうと思っていた。けれどそうではなかった。だから私は分からなくなってしまった。

違ふよミツミ、そういうのじゃないんだよミツミ、と井坂は度々私に言う。ごくありふれた会話をしているとき、私が不意に冗談をいったとき、彼は困ったように笑いながらそう言うのだ。そしてその困ったような表情の奥で、私に心底呆れている。その度に私は、自分はやはりどこかが違っているのだと、そう思わずにはいられない。あんなにも当たり前のように井坂という男と二人でいるときでさえ、私はやはり、どこかが違ってしまっているのだと。

眩暈がした。頭上の光が幾重にも重なる。それはずっと私を見ている。あの教育実習生が十歳の私の中に女を見たこと。そしてその私が当然のように井坂と寝ていること。どこにいてもその白い光は私を照らし出して、肉の間からこの身体を切り開こうとして来る。すべてを晴天の下に晒そうとして来る。途端に気分が悪くなった。

片手を付いて、ゆっくりとソファーに上ると、座面が深く沈み込む。私の腕は祐の身体のすぐ傍に向かって真っ直ぐと伸びて行った。目の前にある少年の顔を見ながら、私は誰かの表情を思い出す。多分それは、泣いていたり、へらへら笑っていたりする。でも、結局誰の顔の表情なのかは良く分からない。

「嫌だ……」

半端に開いた口から、かすれた声が漏れて来た。私は祐のことを愛おしいとでも思っているのだろうか。可愛いとでも思っているのだろうか。喉の辺りが熱くて、息苦しい。蒸れたストッキングの中で、指が逃げ場を求めるように動く。ずっと助けて欲しいと思っている。私は彼の細い二本の脚の間に膝を付いて、その頬に触れようとした。

そのときだった。祐が突然目を開けて、私の方を見たのは。すぐ近くで目が合った。

冗談でも比喻でもなく、息が止まった。

私たちの間を、確かに何かが、過ぎ去って行った。

「……いいよ？」

人形のような少年の声が小さな部屋に響いた。

私は突然恐ろしくなって、身を引いた。

「何」

パンプスの踵がぐらりと揺れて、私はその場に頽れた。低いテーブルの角に頭をぶつけた。視界が歪む。祐の頭が、私よりずっと高い所にあって、見下ろされているのだ、とそのとき思った。無意識の内に後ずさろうとして、掌には固い床の感触だけが伝わる。立ち上がれなかった。私はゆっくりと首だけを持ち上げる。

少し変な形をした頭。二年前に初めて見たときからそう思っていた。童顔で可愛らしい容貌をしているのに、そこだけが不格好だと、勝手なことを度々考えていた。今はもう、それも分からない。頭の輪郭を縁取る蛍光灯の光が眩しくて、私には何も見えない。

祐が身体を起こした。真っ白な裸足の指が、私の座り込んでいる地面に落ちる。翹ごとゆっくりと墜落して行く。

私は惨めに口をぱくぱくさせて、必死に言葉を探していた。何か言わなければと思えば思う程、私の喉は震えて、嗚咽のような情けない声だけが漏れて来た。彼は上半身だけを起こしたまま、何も言わずに地べたの私を見つめている。

祐は多分、全部知っていたのだ。最初から全部。

逆光でろくに見えないその表情が、そのときほんの少し歪んだ気がした。白く眩しい光は、私たちに落ちる影をどこまでも深くして、そしてずっとそのままだった。

しかいの森/今泉とびら

しかいの森/今泉とびら

しかいの森

今泉とびら

俺には悩みなどない。

「事実は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだったのだ」—中島敦『山月記』

自分には才能があると信じてしまっているのに、どこまでも怠惰であること。あるいは、その気になれば才能を発揮できるという思い込みを保つために、いつまでも怠惰であること。強いて言えばそれが悩みだ。

それも今日で終わりだ。才能の不足を暴露することによって、終わる。

寒風吹きすさぶ一月。親が試験会場近くまで車で迎えに来ている。もう日が落ちて真っ暗な中、街灯を頼りに雪を踏みしめて歩く。

いや、俺の最近の成績的にはこれでも大成功だろう。ただ、現実を見ようとしてこなかっただけだ。本番、共通テストまで。

結局、俺は彼のようにはなれなかったわけだ。

彼——森は、中央国民大学でα国語を専攻する、俺の唯一のツイッターの相互フォロワーだ。アイコンは緑の単色。本名は知らない。一浪して今は学部二年生らしい。中央国民大学は、全てのキャンパスが東京に位置する、俺の第一志望校だ。帝都大学には負けるが、国立大学でも屈指の難易度を誇る。

森は俺にとって憧れの人だった。彼は賢く生真面目でいつも正しかった。ツイートの鋭さと波長は俺に合っていて、それは向こうも同じだったらしい。匿名性SNSの中でどちらともなくお互いを「個」として認識した俺たちは、お互いをフォローするに至った。自然言語の分類に関するユーモア溢れる彼のツイートに俺がいいねしたのが最初だったと思う。フォローしている言語学徒がよくいいねしてツイートをこちらに流してきたから、勝手に顔見知りのような感覚でいた。しばらくは時々彼のツイートを眺めるだけの日々が続いた。なんとなく確認した過去ツイートもきっかけになり、俺はすっかり彼

を気に入ってしまった。ある日、通知欄から俺を認識したのであろう彼は、俺の言葉遊びツイートに応えるように同じ単語を使用してジョークを放ったのだ。もしやと思った俺は恐る恐るフォローボタンを押した。むやみにフォローはしない主義なのだ。すると、すぐにフォローが返ってきたのだった。

その瞬間から、思い上がってしまった。俺は、彼と自分が同じ土俵に立っていると、勘違いしていた。

その日のうちに軽く自己採点をした。まあ、わかっていたことだが、この点数では、第二志望の北関東大学に進むしかない。

「浪人したい」

家族団欒の【夕餉 | ゆうげ】はその言葉がつかえて進まなかった。比較的貧しい我が家でそんなことが許されるわけがない。それに、そこまで中央国民大学に執着していることを悟られたくなかった。あくまで、それなりの努力をして、北関東大学に受かった。そういう体を保つ。

もう勉強をする意味はないから、一番に布団に潜る。北関東大学なんて余裕で受かる。とたんに、動悸がしてきて、これまでの、俺の人生は、何だったのかと。虚無感と焦燥感が押し寄せた。

こんなはずではなかった。こんなはずでは、なかったんだ……

神童だった。勉強のできる子供だった。塾には通わなかったが、どうせ暇なので、本をひたすら読んだ。宿題は堅実にこなした。それだけで地方の公立小中学校では一番でいられた。

「こんなに賢い子を受け持つのは初めてです」

担任にはそう言われた。そしてそれは、必ずしも望まれたことじゃなかった。

「俺たちを馬鹿にしているんだろ」

「二十歳過ぎれば只の人」

両親にはそう言われた。俺は両親を愛していたが、その感情は上手く伝わらなかったのだろうか。両親は大卒ではなく、そのコンプレックスの片鱗を感じることも稀にあったが、それが自分に向けられるとは思ってもよらなかった。それとも、こう言われる本当の原因は別にあって、こう考えてしまうことこそ俺が両親を「馬鹿にしている」証拠なんだろうか。いずれにせよ、俺に当てつけられたその言葉を、理不尽だと指摘できるほど俺はまだ賢くも強くもなかった。俺は百点のテストをビリビリに破いてゴミ箱の下の

方に捨てるようになった。こんなものには何の価値もない。

嫌でも耳に残る言葉を胸に、勉強した。俺にできることはそれだけだった。只の人になぞなっていたまるか。

順当に、地元で一番の進学校に入学した。そこでは俺が一番でいられなかった。誰も虫歯を持ってなくて、誰も不登校ではない、そんな学校。競争社会に接続される前段階として、良い環境だったと思う。だから、もっと勉強した。部活は適当に決めてすぐ幽霊部員になり、その分の時間で勉強をした。そして、高校一年生の秋口。二日間にわたって行われた模試の手応えは確かで、俺は達成感に満たされた。二日目、午前中で終わったテストの帰り道。

不安になる程に雲一つない青空が広がっていたから。もう、いいよ。そんな声が聞こえた気がして。

俺は全てから逃げ出した。

俺は高校周辺の道を全く知らない……勉強ばかりしていて、自分から外に出たことがあまりなかった。寄り道もほとんどしない。友人はいるにはいるが、学校の外で遊ぶほど親密な奴はいない。別に、それについて後悔などしていない。青春への憧れはハナからなかったから。俺には勉強があればいい。

交通量の少ない橋の上からのんびりと川を見下ろす。大した高さではないが、覗き込むのが恐ろしいことに変わりはない。それなのに、そこには奇妙な引力が生まれていた。

落ちてしまいたい。

誰かが言っていた。この倒錯的な気持ちには説明がつくのだ、と。落ちるのは怖い。死ぬのは怖い。だから、脳は落下をイメージして回避行動をとらせようとする。それを、落ちる想像を積極的にする自分は「落ちたい」のだ、と錯覚してしまうらしい。

俺は、俺に破滅願望があることにうっすらと気がついていて。それは、脳の錯覚だろうか。

俺の本能は「今死ね。そうすればお前の人生は美しい」と言っていた。そして、俺は直感や衝動に身を任せる人間ではなかった。

俺は社会に生かされている。それは、俺の将来性を見込んでのことだ。そして、それに報いるには、社会が望むように、労働や学問をするべきなのだ。

そして、その社会が払ってきた負担が各個人のもたらす利益に対して最大になる時期というのが、大学生、または大学院生なのであった。

俺は思った。もし、俺が労働や学問において成果を上げる前に死んでしまったら、それは酷い裏切りになるだろうな、と。そしてこうも思った。もし、俺が労働や学問にてんで向いていない人種だったら、俺は人生を早めに「損切り」するべきなのだろうな、と。そして、今のところ、俺にそのような予兆は見当たらなかった。俺は勉学において優秀

なので、恐らく労働や学問も人並み以上にこなせるだろう。ただ、少し不安になっただけだ。俺はペーパーテストは得意だが、課題には人の何倍も時間をかけてしまうタチだから、要領良くこなせないような気がして。

そう、少し不安になっただけのはずだったのだ。

だから、あてもなくひたすら遠くへと自転車を漕いだ。不安を掻き消すように。しかし、俺の目指した「どこか」になど辿り着けなかった。俺は結局夕食前には家に帰った。

あの日から、不思議と俺はすっかり勉強ができなくなってしまった。帰宅部の俺は何の課外活動も行わずに、学校から家に帰ってはすぐに寝ることを繰り返した。課題もやらなかった。親はもともと俺に優れた学力なんて期待しちやいなかったから、何を言うこともなかった。俺はそれが気に食わなかった。

模試の校内順位は一位だった。

来るところまで来てしまった。俺はその試験の結果を懇切丁寧にしまっておいた。試験なんて幾つもあるし、それらの結果が来るのは数ヶ月後だ。親にはバレないだろう。俺は俺の誇りを心のなかに留めておくことを選択した。これが攻撃されたら俺は耐えられる自信がなかった。

それと同時に、俺が望んでいたものは、こんなものだったのか……そう、失望した。そうか、俺は結局、褒められたくて勉強をしていたのかも知れない。

「文系に進学して帝都大学を目指す気はないか？」

あの日のテストの結果を見た担任は面談でそう言った。俺の志望校は中央国民大学だが、文系に進学すれば帝都大学に受かる余地があるということなのだろう。まあ、おだててやる気を出させようとしているという線もあるが、うちの高校は年に何人かは生徒を帝都大学に送り込んでいるし、そう非現実的な話でもない。文系進学を勧めるのは、一般に、文系の方が簡単とされているし、俺が明らかに文系に向いている人間だからだろう。作文やプレゼンを評価されることが多かった。賞も幾つか取った。それに、なにより、やっていて楽しいのは文系科目だった。

しかし、俺は理系を選んだ。親に「理系の方が確実に稼げる」と言われたから。学歴厨的には、より賢いとされる理系に行くのは当たり前だから。そういう理由がないとは言いきれないが、一番には、俺の矜持とも言えるものが根拠にあった。

俺には、俺が人間である限り、この世に存在する学問をゆくゆくは全て理解できるであろうという、幼稚な全能感が未だに残っていた。そして、最短でそれを成すには、独学可能性が低い理系学問のうち、より高度に体系化されていて、世界を記述するような

学問をやらなければならないのである。つまり、俺は物理学をやると決めていたのだ。

諸々を鑑みると、実は数学でも良いのだが、あれは「言語学」であって、俺は記述される対象に迫らねばならないのだから、少し分野が違って来る。

「楽しさ」より「矜持」を選んだ俺は、その選択をした自分を誇りに思ったが、同時に、これからの困難を案じた。というのも、学問を「楽しむ」探究者が最も成果を出せるからだった……

そんなことを案じなくとも、俺の成績はみるみるうちに落ちていった。眠ることしかしていないのだから当然だ。次第に、授業中、挙句の果てにはテスト中にも眠ることが増えた。教師には叱られなかった。高校の教師はほとんど叱るということをしない。

俺は自分が何もできなくなってしまったことをもどかしく思った。勉強に全てをかけていたから、何かしたいことも思いつかなかった。

なんでもないはずなのに、俺には希死念慮が纏わりついていてた。ただ。

一説では、自殺者の3割は、死の直前にアルコールを摂取していると言う。そうであっても、自死は一般に、不安定で判断力が落ちた状態によってもたらされると言える。俺は、自分の判断にケチがつけられるのが嫌いだ。そのように、無計画で、非合理的に、俺の人生は計画されないのだ。避けられない「死」というイベントでさえも。

俺のプライドは、コイツら自殺者と一緒にされたくないと叫んでいた。だから、俺が希死念慮を口にすることは一度たりともなかった。

だがそれも、あくまで現実での話だ。

あの日から、鬱屈としたインターネットの空気に触れた俺は、自分の感情をむやみに言論空間に吐露するようになったのだ。

「悩み」という言葉が嫌いだった。「考えすぎ」も。それらの言葉は考えることを悪いかのように語るから。悪いのは優柔不断な性格や、思案が必ずしも伴わない不安であって、考えることではない。そういうことに、思考中毒者の俺はムカついていた。

だから、俺は俺の確固たる選択と、そこに着いて回る苦しみを喚き散らした。「救ってくれ」、と。それだってダサいことこの上ない。しかし、ツイッターでは言いっこなしだ。

そういえば、あの日からだ。ツイッターに没頭し始めたのは。

ツイッターを始めたのは高校生になってからだ。受験が終わり、スマホを新調したのに合わせてツイッターを始めた。俺にとってツイッターは憧れの地だった。ツイッターを始める前から脳内でツイッターをしていたくらいには魅力を感じていた。そして、その期待は裏切られることはなかった。

アイコンは著作権フリーの幾何学模様にして、とりあえず好きな動画投稿者やアーティストをフォローした。彼らはたいてい解説動画を作るような教養人だった。俺は、文

化資本に富んだ家庭に生まれなかった劣等感からか教養に飢えていて、インターネットを格好の餌場としていた。ツイッターという文字を読んだり書いたりすることに熱中してしまう人間の巣窟は、必然的に俺をのめり込ませる力を持っていた。

当時の俺はまだ自分を教養人の卵だと思い込んでいて、過激なエスニックジョークを読み漁りながら、「この真意がわかる俺、カッケェ！」とかなんとか思っていたのだ。その過程で、言語学界限に接触した。森はそこにいた。もっとも、彼はどちらかと言うと語学の人なのだが。

森は俺の理解者だった。俺が俺の人生で象徴的な出来事や苦しみを吐露すると、森はそっというねをつけた。そんな言葉無きやりとりが続いた。とはいえ、俺は森の批評的なツイートに惹かれていたから、同じように森にも俺の批評的なツイートを評価してほしいかったのだが、そう現実には上手くいかない。いや、ないものねだりなのだろう。どうでもいい個人的な事情を聞いてくれる存在の方が貴重とすら言えるかも知れない。しかし、俺は自分の学術的・文芸的な才能を信じていて、それを評価してほしいくて堪らなかったのだ。

森は俳句が好きらしい。たまにブログに自分の詠んだ句をまとめている。俺には詩はよくわからないが、森はなんか凄いところに寄稿したこともあるらしい。しかし、大衆ウケが良い句を詠むような奴ではないらしいことはわかった。ツイッターでアンケート機能を使って知人と四人で俳句バトルをしたときも最下位だったし。最近も、自分は散文詩の方が得意であるのではないかとの憂いを匂わせるような投稿をしていた。俺も詩を理解したい。俺は森の少しだけ俺をあの頃の勤勉な人間に戻してくれるところが好きなのかも知れない。

一晩明けると、俺は冷静になっていた。たいていの不安は睡眠で解決するものだ。夢の世界に憂鬱はない。今日は学校だ。正確な自己採点をしなければならない。結果は見えているが。

森が一枚の写真を投稿した。うつ病の診断書だった。森にはもうとっくにうつ病の診断が下りていたものと思われるが、診断書はその日初めて貰ったらしい。病院に通う体力もなかったような様子だから、ようやく行けたようである意味では喜ばしいことだ。

森は物心ついた頃からずっと鬱っぽかったらしい。俺は幼い頃は漫然と楽しかったような気がしているが、森はそうではなかったらしい。

森が自殺未遂をした。首吊りらしい。森が自分で報告をした。アパートの設備が壊れて、あえなく失敗したらしい。

森がまた自殺未遂をした。首吊りらしい。森が自分で報告をした。今度はアパートの備品を壊さずに済んだらしい。

森が投身自殺をした。正午の東京は晴天だとスマホの片隅で天気予報が告げる。

彼は長ったるい遺書を残していった。ツリーを雑にスクロールする。受け入れたくなかったので目を逸らした。それは死そのものへの拒絶ではなく、俺の審美眼による「不合格」判定だった。

その遺書は醜かった。

「ハア……」

ついにやったか、これから思い直すだろ、嘘だろ、なんて発想が一挙に通過していった。実感が沸くわけがない。状況を整理しよう。確かに、ここ一週間で彼は2回も自殺未遂をやらかしたようだった。今まで彼が自殺未遂を起こしたことはあったのだろうか。少なくとも俺は初めて聞いた。それらは彼自身が事後報告したことだった。どちらもアパートの自室で首吊りを試みて、あえなく失敗したそう。それで、手段を変えたと、そういうわけなのか。しかし、今度は飛び降りでは、助かる見込みは……

彼の死亡宣告は、ここからではコンマ何秒かわからないが、全て十二時ぴったりに投稿されていた。これらは「予約」されていると見てよい。本人も言う通り、事前書き留めたものだろう。

そして、問題になるのは彼の性格だ。彼ほどの人間が、ここまで用意をしておいて、自殺を未遂で終わらせるなんてことがあり得るだろうか。

遂げられるかわからない、とは書いてあるものの、これらのことから結論付けられることは、ほとんど確実に彼は死んだと見てよいということだった。

じゃあ、どうする……

どうするって、残るは遺書を読むことだけだ。

——いつもの彼らしい語り口だった。彼はずっと憂鬱だったから。ただ、内容が良くなかった。抽象的な語りはいつもの鋭さも俺と合う波長も損なっていた。文章には私怨が滲んでいて、美しいとは言いたくなかった。

彼はこの世に幸福を見出せないから死ぬのだと言う。それに、少しだけ安心した。「ごめんさい」というツイートのままに、世界に対する謝罪を口にして死んでしまうより

は良い。彼ほどの優しい人物には、もう少し自分のことを考えてほしいと思っていた。自分のことを考えた結果、最適解として死にます……それは、止めようのない自殺の文句であった。

曰く、彼は、ずっと世界に虐げられてきたのだ、と。しかし、去年の秋に「出会い」があったらしい。それをきっかけに、少しずつ立ち直れたようだ。それは良いことだが、ツイートを見てもそんなことはわからなかったのが悔しかった。そんな彼が今日死ぬのは、その「出会い」によって得られた関係性が破壊されてしまったことに由来するらしい。個々の事情が云々というよりかは、そういうことを許してしまう社会が許せないのだそうだが、ツイートからは何が起こったのかさっぱりわからない。第一、言葉の端々から、それはなんだか痴情のもつれのようにも見えた。だから、彼の死になんとか説得力が足りない。賢い彼がそんなことのために死んでしまうのか？　まあ、説得力なんてなくても、積み重なったほんの少しの理由で、ほんの少しの行動で人は死ぬのだから。

他人の苦しみを軽視するのは善くない。得てしてそのように個人的な苦しみは他人にはくだらないものに映る。さっさと次を読もう。

彼は搾取されることもすることも望まないらしい。この世界は多少なりともそのような事態を避けられないのだから、彼にとってはさぞ辛かったことだろう。彼は、自身は幸福を勝手に再分配されるために存在しているのだと妄想的に（これは本人の言である）確信してしまった。

生きていれば何かがある、それでも生きていてほしい、そういう文句は他人のエゴイズムだと彼は言い切った。そんなものではごまかせないほどに人生は苦しい、と。「あなたの後味の良し悪しなんぞために絶望的な道を歩まされるのは嫌です」酷く共感できる一節だった。

ひとにやさしく、とか、幸せになる努力とか、そんなことをしてみても何も返ってこないし、ずっと死にたいと思っていたし、もう死に時だと彼は言った。「お世話になりました」律儀にもこちらにそう一言残していった。

届きやしないのだろうけれど、恨むべきものを恨んで、憎むべきものを憎んで、死ぬ。自殺が復讐性を孕むことはしばしばあるが、彼は彼の自殺は復讐を為せないとやった。それでも、自分が苦しいから、どこまでも自分のために死ぬ。それはやはり、どこまでも止めようのない自殺の文句であった。

きちんと最後まで読み終えてハッとした。俺は何をしているんだ。何かにつけ評論してみたことをするのはツイッターの悪癖だ。まさか、自分が遺書まで評論するほど毒されているとは思わなかったが。評論というほどのものでもないか。俺は「人間関係の悩み」に疎い人間だから、彼の最も大きな悩みに共感できなかった。辛口評価してしまった原因はそんなところだろうか。俺の人生経験の薄さが出ただけだ。

遺書……初めて読んだ。ツイッターに遺書を書くやつなんかいくらでもいるだろうが、俺のタイムラインには流れてきたことはなかった。それに、こんな長文のものは滅多にお目にかかれないだろう。

ふいに、少量の胃酸が口腔内に独特の酸味と甘味を与えた。それをどこに宛てるべきかわからない言葉ごと飲み込んだ。

次第に俺は、彼の希死念慮を肯定してやればよかったと後悔してきた。彼は死の五日前、マシュマロという匿名で彼宛てに質問などを投げることのできるサイトのリンクを貼っていたのだし……どうせなら、何か書けばよかった。自死に関する人々の思いの「死にたいなら死ね」「夢見が悪いから死なないでほしい」というような側面に言及した上で、彼の意志を消極的に肯定する、それくらいのことでいいから。しかし、ほんの少しの共感で救えるものでもない。かと言って、俺には俺より賢い彼に論駁する術もない。

……もしかしたらこんなのは嘘かも知れないし、自殺なんて実行できなかったかも知れないし、また失敗したかも知れない。生きている可能性はある。帰ってくる可能性も。一応、念のために、彼のアカウントの通知をつけておいた。

それから、俺は言葉を失った。

「雪が湿っている」

なんでもないツイートをした。なんだか、このツイートは誰にも観測されないような気がした。そう、これではまるで彼にフォローを外されたようだった。俺の存在は彼の生を繋ぎ止める役割を果たさなかった、そう思うと苛立ちが込み上げてきた。俺には彼を生かしきるだけの価値はなかったと宣言されてしまった。

ツイッターを開いては森のツイートを確認する癖はしばらく直らなかった。そんな日々が、ある日終わりを告げた。

二月二十四日、その日から、戦争が始まった。圧倒的な死の気配が、インターネットを席卷した。

俺たちはその予兆を早くから目の当たりにしていた。大国 γ は、 α 国による β 国侵攻計画を表に出した。始めは疑わしく、あるいはその発表によって頓挫するということもありえたそれは、日を経るにつれて現実味を帯びていった。俺たちのタイムラインには α 国の戦車が β 国国境に運び込まれる様子が映った映像が何度も流れてきた。彼の止まってしまったいいね欄を遡れば、 α 国が β 国に軍事的圧力をかけているこの事態を非難する記事がすぐに見つかる。

軍事的圧力に留まるかという見方もされたそれは、最悪の方向に転じた。しかし、それを彼が知ることはなかった。

大学の二次試験当日であるにも拘わらず、俺は食い入るようにタイムラインを見つめていた。試験どころではなかった。歴史の一大事が今、起きている。 α 国国境やミリタリー国境のインフルエンサーが次々と情報を流す。 α 国軍は β 国の首都目前に迫っていた。

配慮と良識のある精鋭を集めたタイムラインにこそ流れてこなかったものの、少し自分で調べれば、捕虜や死体など、戦争の残酷さをまざまざと見せつけられるような光景が広がっていた。「現代の戦争」、そんなワードに象徴されるように。

それでも、ツイッターの人間はやはり節度がある。治安が良い。基本的にはバズったものしか流れてこないから、というのものもあるだろうが。

俺がツイッター以前によく滞在していた匿名掲示板には、精神的ブラクラと呼ばれる、視聴者をグロテスクな画像やgifに誘導してショックを与えるという嫌がらせ文化がある。その際に用いられる画像は凄惨な拷問や強姦の被害者ばかりだった。

悲しいことに、屍はそうのように抗いがたく嫌悪されるものなのだ。屍になりたい奴なんているのだろうか。俺だって美しく死にたいが、そんな望みは叶わないことも知っている。屍は常にグロテスクだ。俺が死んだら焼かれるであろうことは幸いだ。死は身体性をどこまでも剥奪していく。

だからこそ、希死念慮が蔓延する現代、死が妙に美化されているようで気に食わない。まあ、死なんていつの世の中も美化されるものだが。俺だって本音を言うと昭和の文豪が軒並み自殺していることに美しさを感じないでもないが、自殺なんてそんなに美しいもんでもないだろう。一時の気の迷いであることも多い。

大体、希死念慮とは言うが、その意味合いだってひとによって違ってくる。例えば、「疲れたのでこの場に倒れ込んで何日も眠りこけていても許してほしい」とか、「自分の人生に改善の余地が見えないから離脱したい」とか、「自死をもって自分を過大評価させたい」とか、「効果的な復讐の手段はこれしかない」とか、「世の人々に申し訳ないので立ち去ります」とか。思いつくだけでこれだけあるのを、希死念慮と一括りにしてしまうのは何と言うか……不正確だ。そして、俺は不正確なことが嫌いだ。

そもそも、病める者こそ美しい、あるいは病める者こそ美しいものを作ることができるような向き自体がよろしくない。病は病だ。目病み女に風邪ひき男の情緒、情趣がわからない俺ではないが……創作に病が生きると思うのは病める者であり、自らにも才能を発揮できる場があるとして安心するためにそう思うのではないか。あるいは病める者の周囲が、病める者の人間的価値を疑わないためにそう思うのではないか。まるで、発達障害者にはみんな特別な才能があるんだと思い込むように。

病める者が病を利用して良い創作物を生み出したとしたら、病さえ利用するような努力が結果的に花を咲かせるだけの話なのだろう。因果が逆なのだ。

健全に、ひたすら努力した者が報われるように、病などという努力するにあたって邪魔でしかないものを持つ者は努力する者に勝てないように、なってしまえばいいと思った。それに、全てが緻密にマニュアル化された未来にはそのようになると思った。

そしてそれは、俺自身が病める者だと気がついているからこそその自虐でしかないのかも知れない。

こうも真面目な俺が、真っ直ぐ人生を歩めないのは、無意識下の俺自身にそれを障害されているからに違いないと考えている。ずっと、精神科に行きたいと言い出せないでいる。数えきれないほどの遅刻、忘れ物、ディスコミュニケーションを味わってきた。遅刻は特に酷く、全く治る気配がないどころか悪化している。恐らく鬱も悪さをしているからだろう。高校時代は何十回も、いや、下手したら三桁に届くほど遅刻したが、担任が揉み消して、通知表には零と表記された。だから、遅刻常習犯なのに皆勤賞を貰ってしまった。そのときのクラスメイトの視線は思い出したくない。

極め付きは希死念慮である。

俺のなかに希死念慮が芽生えたのはいつからだったろうか。

小学生が授業中に耽る妄想の定番と言えば「学校に侵入したテロリストを撃退する」である。集合的無意識とはこのことかと思うほどに、誰が言わずとも不思議と共有されているこの妄想は、ほかならぬ俺にとっても定番であった。もっとも、俺は小心者であるので、いかにしてテロリストから「逃げる」ということも考えていたのだが。成功があれば失敗がある。律儀にも俺はときどき「失敗」した。

そんなことが契機になったのだろうか。俺の死への想念は。

小学五年生の時だったか、同級生が

「死にたい、窓から落ちる！」

と泣きわめいたことがあった。彼はいわゆるメンヘラらしく、周囲は薄い反応を示した。俺は彼のパーソナリティに関心がなかったのも、その件ではじめて知ったが。

「死にたい」「死にたい？」

「死にたい」とはどういうことだろうかと思った。

俺がそれを正確に理解したのは、中学生になってからだった。

俺はいじめられた。理由はよくわからない。中学時代の俺には友達が一人もいなかった。登下校や移動教室では一人で教室に向かった。それ自体は苦痛ではなかったが、周囲はよく思わなかったらしい。いじめられてもクラスの誰も悲しまない身だ、都合の良いターゲットだと思われただけかも知れないが、とにかく、いつからかいじめが始まった。

別に殴られたりはしない。ただ、四六時中悪口を言われるだけだ。後は、給食が一品か二品、配膳されないということが続いた。たいてい、俺の分は勝手にじゃんけんされて誰かのものになっていた。まあ、そんなに食べる方じゃないからいいのだが。

正直言って、悪口の内容はもうほとんど思い出せない。気にしていなかったから、なんてカッコいいことを言ってみたいが、そんなことはないので、一種の適応機制が原因なのだろう。頭が良いことに嫉妬されていたことだけは嬉しかったので覚えている。

言葉だけのいじめということもあってか、いじめられていたという事実を自分で認めるのには3年ほどかかった。そう、わりと最近まで、自分では認められなかった。自分がいじめられていたという事実が恥ずかしかったり、自分にも非があるような気がしてしまったからだろう。もちろん親にも言わなかった。

弱みを見せたくないのは、直視したくないのは、つけ込まれるかもしれないからなどという将来を見据えた合理的判断ゆえではない。単にみっともないからだ。俺のプライドが弱い俺を許さないからだ。弱さとは醜さだ。少なくとも、俺はそう思った。

それでも、直視してきた弱さがあった。それこそが抱えてしまった希死念慮だった。いじめられてから、俺には希死念慮が芽生えた。希死念慮を感じる自分が嫌だった。情けなかった。悪口如きで潰れそうな自分が。

いじめが終わってからも、希死念慮は消えなかった。むしろ、新たな苦しみが生まれた。不幸なうちは思い切り不幸な素振りをしていられるというものだが、不幸が去り、心に残った傷が癒えぬうちに、もう終わったことだ、さっさと立ち直れ、と急かされるのだ。他ならぬ自分自身に。

時間が解決してくれることというのは多い。希死念慮は薄らいできてはいる。ゆっくりと、でも着実に。いじめられていた日々よりはマシだという思いには何度も助けられた。

ただ、遅すぎた。あの日俺が負けたのは、破滅願望などよりももっとタチの悪いものだった。俺は疲れてしまった。

わかっている。俺は怠惰であるのではない。俺は、病んでいるのだ。あの日からいつまでも動けないのを、自ら動かないのだと思い込むことで、事態はまだ深刻な状況ではないと位置付けている。

いい加減、俺はこの怠惰な日々には即物的に終止符を打つ。大学生になったら、一人暮らしも始められるわけだし、こっそり精神科に行こう。

早いもので合格発表の日だ。Webで北関東大学に合格したことを確認した。俺は合格することを確信していたから、正直そこまで感動はなかったが、一安心といったところだ。これから引っ越しで忙しくなるな。大学生活が楽しみだ。第一志望を目指せなかったことは悔しいが、大学という機関に憧れがあってこそその学歴厨だからな。院で中央国民大学の方に進学することもできるわけだし、切り替えて頑張るか。

引っ越しの当日が訪れた。朝早くから車で出発する。家具は父親が家族経営の祖父の会社から借りたトラックで運んでくれるらしい。移動時間はやることもないのでツイッターを確認する。そこに森はもういない。

もう撤回されたことだが、数年前、ツイッター運営が、アクティビティのないアカウントを消去する、と告知してきたことがあった。撤回されたとは言え、この試みはアーカ

イブ化等の対策を講じた後に再開する見込みがあるそうだ……森のツイートも、いつかアーカイブになるのだろうか。アカウントを消さなければいけない事情があるのだろうし、記録が残るならありがたいが、経営方針が変わって普通に消すことにしました、なんてことになるのはやめてほしい。

ネット上の書き込みだって儚いものだ。いや、言葉を書き残すこと自体が死へのささやかな抵抗なのだろう。

遺書なんてそんなにいいもんじゃない。それは俺が見てきた通りなのだが、

「口にだして言ったら それは ぜんぶ 遺言だとおもいます」——くどうなおこ『目をとじて隠れる』

あらゆる言葉は遺言だった。

「遺伝子を残さないならミームを残すしかないので学術と文化を諦められないみたいなのはあるよね」——りちゃ

そんなツイートが目に入った。俺は全く、恥ずかしいくらいその通りに生きている。愛すべきものたちと、他でもない、この俺を、この世界に刻むために生きていた。

俺のそういう信念に反するように、今日も今日とてアカ消しが行われている。凍結されて消えることもあるが、特に女オタクの界限ではアカ消しが横行しているようで、彼女らの動向を辿るのには苦勞する。

俺のフォローしている人間にも、ある時期より過去のツイートを全て削除した者が二人いる。一人の彼は、名が知れてきた上に「守るべき者たち」ができたから、燃えそうな危ないツイートを消すために全消去という手段を頼った。もう一人の彼女は双極性障害があり、鬱の波が来た時期に全て消去したらしかった。

「インターネットに書き込まれた情報はずっと残ります」

ああ、そうだったらどれだけ良かったか。

文字は画期的な発明だった。だが永遠には残らない。

俺たちは粘土板にお気に入りのツイートを刻んで埋めておくべきなのかもしれない。それも大量にだ。そうすればどれか一つくらい後世に残るだろう。そんな夢想をする。これだって誰かのツイートの借り物の発想だ。インターネットというのは夢がある。俺でも誰かの記憶に残れるかもしれないから。

学歴だ何だと言いながら、俺は大学にも同じ希望を抱いてきた。論文を提出さえしてしまえば、ささやかながら俺が人類史の末席に連なることになるのである。いや、全ての人間が人類史に席を用意されているのだが、論文というのは、記録として恐ろしく高品質なものであるという印象がある。研究者になってしまえば、俺が、科学の礎に！それは人生に差し込んだ光明に見えた。俺はこれに縋って生きていくのだろう。

引っ越しの手伝いに来ていた親が帰り、一人暮らしが始まってしまった。俺は片付けが苦手なのでもう若干部屋は汚れている。

外に出て、スーパーの位置を確認するついでに何か買っていこうかとだらだら道を歩いていると、酒屋が目に入った。

ああ、成人したらα国のウォッカでも買おうか。そんなことを思ったが、輸入が規制されているんだったか、と思い直して苦笑した。世知辛い。じゃ、β国産にしておくか。まあ、それまでに戦争が終わるのが一番良いんだが。

俺はコミュニティに所属しないことで中立でありたかった。SNS上の開かれたコミュニティを渡り歩くことでそういう憧れへと近づいた。

だが、そういう甘い考えはもうやめよう。コミュニケーション不全のインターネットでぬくぬく過ごす言い訳でしかない。第一、「SNS上の」「開かれた」コミュニティである、という偏りからは逃れられない。つまり、俺は「現実の」「閉じた」コミュニティに所属することに自ら挑戦する。

まずは……友達作り、「#春から北関東大学」からだ。加えて、所属する部活もホームページを見て決めた。これでとりあえずは良いだろう。

大学が始まった。ガイダンスで同じ学部の人間と交流する機会が設けられていたのは幸いだった。正直、リア垢の運用は上手くいっているわけではなかったから。流れで近くの席の人々のラインを入手できた。

大学生なんてみな病んでいて、哲学書片手に難しい顔をしているものだと思っていたが、そういう小説の読みすぎだったらしい。構内は活気に満ちていて、少々眩しいくらいだった。

フォロワーができた。リア垢の、ではない。リア垢はその性質上フォローバックが盛んなのでいちいち気にすることではない。そうではなく、俺がいつも使っている、あの幾何学模様のアイコンのアカウントにフォロワーができたのだ。ただひたすら、俺が俺の価値観を開示する場に魅力を感じてくれる人間が、森の他にもいたとは。世の中捨てたもんじゃないなと思った。俺はそのとき、自分のなかで森の存在が薄れていっていることに気がついた。俺がインターネットから感じる視線の象徴だった森も、タイムラインに出没しなくなってしまうと、一つの動かないアカウントでしかなくなってしまうのだ。俺は、俺の薄情さをよそに、インターネットの即時性を呪った。俺たちは今に生き過ぎている。

早いものですっかり桜も葉に覆われてしまった。まだ精神科の予約は取っていない。入部を決めた文芸部には新入生歓迎用の企画があり、さっそく活動を始めることとなっ

た。まずは歌詠みらしい。俺も短歌を詠むこととなった。

とりどりなる花の命もつきづきしく風の便りに変はりゆくもの

花鳥風月を取り込んでみました、と自分のジョークを自分で解説するみたいな真似をしてもなお、正直、部員の反応は微妙だった。言葉遊びに終始しすぎているらしい。花弁を便りとする発想も安直だと。なかなか手厳しい。しかし、それくらいの方が張り合いがある。

右も左も分からない大学生活にあたふたとしている。新しいことに慣れるのは苦手だ。新造したリア垢を運用することが増え、幾何学模様のアイコンのアカウントに触る機会は少し減った。それでも、通知はいつでも見えている。何の通知も示さないアイコンが左上に鎮座している。それが、今日は違っていた。水色の丸い点が衛星みたいに重なる。スパムのフォロワーでも追加されたのだろうか。訝しみながらも一応確認すると、ダイレクトメッセージの欄に水色が灯っている。やはりスパムか？

「恥ずかしながら帰って参りました」

そんなメッセージが覗いた。アイコンはいつかの緑^{リユーイーズ}一色、名前は「森」……!?

今しがた帰還したらしい彼に何か気の利いた言葉を返さなければ。どうする、俺はDMに既読をつける設定にしているんだぞ……！　気づかれたか？　とにかくさっさと送らなければ。

「おかえり」

何の変哲もない言葉。

それが俺と森の初めての会話だった。

初夏逝夏/星屑なつき

初夏逝夏/星屑なつき

しょかせいてん
初夏逝天

星屑なつき

真面目で、自己管理に厳しいあいつが遅刻なんて、変だとは思っていた。^{とのいけ}外ノ池と書かれた表札を確認して、ドアをノックする。大学近くのアパートには珍しくも無いことだが、インターフォンなんてものは設置されていないのだ。

「将太、将太ー？」

何度か呼びかけて、近所迷惑になるんじゃないかと思うほど強くドアを叩く。古びたアパートの玄関扉は、あと何度か叩いたら壊れてしまいそうに思えた。

「あの～、この管理人の者ですが。どうかしました？」

これ幸いという気持ちと、まずいところを見られたという気持ちが、胸の中でごちゃまぜになった。とりあえず俺は何も悪いことはしていないので、正直に話してしまおう。「ここに住んでいる外ノ池将太の友人です。彼と同じ神應大学に通っている、^{おとむねじゅん}乙宗潤と言います。今日、大学でガイダンスがあるはずだったんですが、将太が来ない上に連絡もつかないので心配になって訪ねてきたんです」

努めて冷静に端的に話しているつもりだったが、自分で聞いていても情けないくらい声が上ずっているし、妙に早口で息継ぎも出来ていない。管理人さんの表情が、懷疑と同情の色を強めていく。

「その……ガイダンスで、将太は首席入学者スピーチをすることになってたんです。その打ち合わせのために、早めに大学へ来ることになってました。でも、打ち合わせにもガイダンスにも来なくて、何度電話しても出ないんです。あいつ、真面目だから、こんなの初めてで……その」

体中から冷や汗が吹き出すのを感じた。それが幸運だと思ったのは、ただならぬ俺の様子を見て管理人さんが事態の深刻さに気がついてくれたからだ。

「マスターキーで開けてみましょうか。何かあってからじゃ遅い」

「おねがいします」

解錠された金属の扉は、なんだかとても重く思えた。恐る恐る靴を脱いで中へ入ると、いつも将太から香る白檀のような香りに混じって、饅えた匂いが鼻を突いた。本能が、まずいことになっていると警鐘を鳴らす。

「将太……？」

リビングのローテーブルに突っ伏すような形で、将太は死んでいた。窓の外では葉桜がやけに綺麗に見えた。

「なぁ頼むぜ、こっちはお手上げなんだよ」

五月にしては茹だるほど蒸し暑い昼下がり、漆田浩一が唐突に訪ねてきた。こういうことは何度もあったので、別に驚くようなことでもない。

「頼むぜって言うてもな、漆田……俺だって暇じゃないんだ」

そう言いながらも、俺は浮き立つ足を隠すので必死だった。色々あって警察官を退官して以来探偵をしているが、依頼は不倫調査や猫探しばかりで、はっきり言って張り合いがなかったのだ。漆田が持ってきてくれる案件だけが、俺を「正義側の人間」に戻してくれる。

「警察官時代の同僚のよしみでさぁ……頼むよ。今こっちは強盗殺人の件でてんやわんやだったのに、不審死がポンポン起きてたんじゃ、手も首も回らん」

公務員なんだから首は回ってるだろ、とは思ったが口にしないでおく。漆田は警察官のくせに沸点が低くて、しかも何が引き金になるか分からないという厄介な性質があるからだ。ここで、その瞬間湯沸かし器的なモードに入ってもらっては困る。

「ほら……あの、ガキンチョとも仲良くやってんだろ？」

漆田は、高貴そうなスズランのデザインのティーカップを煽って紅茶を飲み干した。捜査一課の刑事特有の訓練のせいで節くれ立った指が、華奢な持ち手には不釣り合いに見える。おかわりを注ごうと歩み寄ってきた事務の安養寺利保ちゃんが、丁寧に手入れされた眉を少し顰めた。

「ガキンチョと言わないであげてくださいな、瀬野尾一翔くんです。しかも、一翔くんは高校生ですし、貴方達警察なんかよりずっと賢いです。ガキンチョという呼称は適切ではありません」

「あーごめんごめん、安養寺ちゃんはそういうところ厳しいんだったね」

この間二十歳になったような女の子に言われてプライドが傷ついたらしい漆田はバカにしているが、利保ちゃんの正式名称へのこだわりは中々のものだ。Macは「マッキントッシュ」と言うくせに、エアコンは「エアーコンディショナー」とは言わないので判断基準は謎だが。

「そもそもですが、これはミステリじゃなくてサスペンスなので推理云々より……」

「安養寺ちゃんもつまらないジョークとか言うんだね」

俺よりはマシだが若干脳筋なところがある漆田にあしらわれたことが気に入らなかったらしく、利保ちゃんは紅茶を注ぐのをやめにしてポットを乱暴に置く。謝罪の視線を送る俺を華麗に無視して、どこぞのブランド物のパンプスをカツカツと鳴らしつつ事務所奥のデスクへ戻ってしまった。

「まあほら、依頼を受けるかどうかは、内容を聞いてからにしようじゃないか」

「ああ……わかった。色々面倒なことになってるから、脳筋バカのお前にも分かるようにかいつまんで話してやる」

漆田は自分で紅茶を注ぎながら、俺に捜査資料を読むよう目だけで促した。

俺達、神保警察署捜査一課を悩ませている複数件の不審死は、元旦に見つかった変死体に端を発する。

元日、年越し特番を見ていた影響で寝不足だった俺を襲ったのは、他ならぬ上司からの猛コールだった。今年で四十歳を過ぎようとしている上司とペアを組んで五年、これほどまでにこの上司とペアだったことを恨んだ経験は無い。

「元日の朝五時半から何です……酔っぱらいの喧嘩ですか？」

撮りためていたホラー映画を観ながら呑気に応えた俺とは対照的に、上司は心底気持ちが悪いといった様子でまくしたてた。

「そんなもんは交番で対応出来る。あのな、神保山の山頂で変死体が上がったんだよ」

「へ、変死体ですか？」

臉が大げさに持ち上がるのが自分でもわかった。ちょうど、目の前のテレビ画面には怨霊がドアップでうろついている。無意識的に、その変死体がとてもおどろおどろしい形相であることを想像した。

「頂上の見晴らし台でな、登山用の……あれだ、ストック？　それで喉を突いた状態で、四十代の男が一人失血死してた。山への散歩を日課にしてる近所のご老人が発見した」

ストックといえば、隣で眠りこけている妻が登山好きで、うちの玄関にも何本か保管してあった。「ストック（登山用杖）のストック（予備）」という寒いギャグを言ってしまっただけで、脇腹を先端で小突かれた覚えがある。小柄で非力な妻がちょっとつついたくらいだったが二週間くらい消えない痣になったので、全力で刺さったら死因になりそうだ。「それで……事件性アリで臨場ですか？」

「その通り。分かってんだったらホラー映画なんか観てねえで早く来い！　さっきから下手くそな女優の悲鳴がうるせえんだよ！」

下手くそと言われた女優は、アイドル上がりの俺の推しだった。不服な思いと一緒にテ

レビの電源を消し、妻へ置き手紙代わりのSNSメッセージを残して家を出た。眠い目をこすりながら見た遺体は、予想とは裏腹に初日の出に照らされて神々しく輝いていた。

二番目と三番目の不審死は、三月に見つかった。発見場所は、廃屋となった小さな温泉旅館だった。雪が融けたのを見計らって、ガス管や水道管に異常が無いか確認しに行った管理者が見つけたらしい。男女一対の遺体は、旅館の名物だった舞台の最上段に並べてあった。服毒だったらしく、口角に泡が残っている以外は綺麗な遺体だった。

「なんですか、このブースは」

「旅館がまだやってた頃は、三味線とか琴の演奏が行われてたらしいな」

今はすっかり寂れて華やかな舞台の面影は無く、一段の面積が広い階段のように見えるが、全盛期は確かにここで演奏会が行われていたらしかった。鑑識作業が終わり遺体が引き上げられるのを待って、試しに舞台の最上段へ上がってみる。

「なるほどな……これは名物だったわけだ」

舞台は、周囲を取り囲む客室から見えるようになっていた。障子戸を開けてめいめいに酒を煽りながら音に酔いしれる客が、目に浮かぶようだった。

四番目の遺体は、四月一日に見つかった。発見場所は、小さな民家のキッチンだ。俺と上司が現場に着くと、たくさんの鑑識係が冷蔵庫の周りに集まっていた。

「ネグレクトってやつ、だったらしいが……こりゃ餓死とかそういったのじゃねえな」

苦虫を噛み潰したような顔で鑑識が引き上げたのは、三歳の女兒の小さな遺体だった。冷凍室の中に、雪と一緒に詰まっていた。俺ら夫婦も子供を作ろうかなんて話していた時期だったのもあり、心に来るものがあった。我々は早くに引き上げて、一課の自分たちのデスクでコーヒーを飲むことにした。

「育児放棄されて、しかもあんところで……」

舌をやけどしそうなくらい熱いコーヒーを飲んでいるのに、頭の中は異常に冷たくなった女兒のことでいっぱいだった。凍りついて白くなった長いまつ毛、柔らかかったはずなのに固まってしまった腕……たった三年の人生は、狭い冷凍室に詰め込まれていた。

「凍死だったんですかね、自分で冷凍室へ入ったってのは無理があるけど……」

「単なる凍死ではないかもしれません。ご遺体の胃の中からかなりの量の赤い実が出ました……セイヨウヒイラギです」

上司に投げかけたはずの疑問は、偶然検案書を持ってきた法医によって拾われた。凍らせてあったために死亡日の断定はできないが、二月以降であることは分かったらしい。「セイヨウヒイラギの実には毒があるんです。子供が誤食すると、少量でも死に至ります」

「腹、減ってたのか……」

中毒死でも、中毒で昏睡後に誰かに冷凍庫へ詰め込まれたのでも、何にせよ三歳の女

兄は非食用の実を相当量食べざるを得なかった。観葉植物についていた赤い木の実が、彼女の目にさぞかし美味しそうに映ったのだろう。その事実だけで、俺は昼食が喉を通らなかった。

漆田はそこまで一気に話して、もう冷めてしまっている紅茶を一気飲みした。視界の端では、利保ちゃんがハンカチを握りしめて怒りと悲しみの入り混じった表情をしている。丁寧なメイクが施された頬には涙の伝った跡が二筋走り、目元のメイクは目尻に押し流されて残骸と化していた。

「五体目が、一週間前に発見された男子大学生ってことだな？」

「そうだ。外ノ池将太、神應大学の医学部一年生だった。四月七日に入学したばかりで、当日は新入生交流会でスピーチをする予定だった」

漆田の言葉に合わせて捜査資料をめくる。友人の乙宗くんの証言として、外ノ池くんは勤勉かつ真面目で優しい模範的な人間だったという旨が書かれている。遅刻をしないどころか十五分前行動が体に染み付いているような人で、発見当日のガイダンスに来なかったことは大変イレギュラーなことらしかった。

「入学してから、たった二十日か」

「正確には二十二日だ。死因はカフェインの過剰摂取で、遺体の口元なんか吐瀉物だらけだった」

カフェインは多量に摂取すると嘔吐を引き起こすらしい。それ以上の量を摂取すると、命に関わる。今回の部屋のゴミ箱には、薬局で市販されているカフェイン剤の空箱が三箱も捨ててあるのが見つかっているんだ、命に関わるどころの騒ぎじゃない。

「自殺じゃねえかって話にはなってるんだけどな」

「そうか……」

なんとなく納得いかなかったが、捜査会議だからと言って帰る漆田を引き止めることが出来なかった。

しばらく、何が納得いかないのか一人で考えていた。目の前を利保ちゃんが何度か往復して茶器などを片付けてくれていたが、それに礼を言うことも出来ずにただ一点を見つめていた。何が引っかかっている？

「ヅカさん、どんだけ考えても意味ないんだから早く僕にそれ見してください」

「うわぁっ!!」

驚いた反動で一人掛けソファから飛び上がり、その勢いのままに声の主の方を見た。狭い事務所の中を何度も反響するくらいの叫び声だったのに、声の主は驚くでもなくただうるさそうに顔をしかめている。色白な頬に長いまつげが影を作る、眉目秀麗な少年だ。

「一翔くん！　集中してるときに背後から声をかけないでくれっていつも言ってるだろう！」

一翔くんは怒鳴り散らす俺に怯むこともなく捜査資料を奪い取ると、慣れた手つきでめくり始めた。初めて読む人間には少なからず衝撃的な内容であることに違いなからうが、表情はほとんど動かない。眉頭が少し寄るだけだ。児童向けの図鑑くらいの厚さはあるかという捜査資料を十分くらいで読み切ると、放心したように遠くを見つめた。

「一翔くん……座ったら？」

返事をするでもなく、フラフラとソファに座り込む。顎下で切りそろえられたストレートヘアが揺れた。綺麗な切れ長の目は、どこも見えていない。一翔くんは考え事をしているとたまにこういう風になることがあったが、今回は少し長い。まああの情報量じゃしょうがないか。

「一月の不審死は、ちゃんと調べが入ってないんですね？」

つぶやくように一翔くんが零した。制服のネクタイが、彼の白い手によってグイグイと緩められる。

「そうだね、一月のご遺体はストックも被害者の持ち物だったし、足跡も一筋しか無かった。そもそも、自宅には遺書みたいなものがあったから、警察は自殺だと決め込んでいた感じ……」

「ひどいわ！　ご遺族の方は何もおっしゃらなかったの？」

悲痛な叫びと共に利保ちゃんがデスクから立ち上がる。キャスター付きのピンク色のイスが反動で倒れた。

「うん……お父さんは亡くなっていて、お母さんは重度の認知症。施設に入るのでもなく、被害者が介護していたみたいだ。そのために、彼は仕事を辞めている。」

「交際していた彼女とは、介護のために付き合いが悪くなった被害者に愛想を尽かして破局って書いてありますね」

ショッキングな遺体の状況にしては早い捜査の打ち切りに、異を唱える……もとい、唱えられる人間は一人もいなかったというわけだ。

「三月に発見された遺体は服毒……毒っていうか農薬ですね」

「そう。ただね……この二人、一ヶ月後に結婚式をする予定だったんだ。なのに、心中？」

両家共に親族は捜査打ち切りに反対してはいるが、服毒という状況から自殺の可能性が高いことを認めざるを得ない雰囲気になっているとのことだ。

「四月一日の女の子は……これ、死因はいいとしても誰が冷凍室に入れたのが謎ですね」

俺は深く頷く。女の子の家にはセイヨウヒイラギの鉢植えがあったようだから、空腹に耐えかねて実を口にしたのは不思議ではない。しかし、自分自身で冷凍室に入るのはほぼ不可能だ。誰かが、亡くなっている女の子を雪と共に冷凍室に詰め込んだと考えるほかない。

「それで？ この大学生はカフェインの過剰摂取……これも自殺で片付けられてるんですか」

「そうみたいだね」

この辺では名門と名高い神應大学の医学部医学科に、しかも首席で合格している。その上、小学生の頃から救急医を目指していて、決して裕福ではない家庭事情を抱えながら必死で勉強していた。そんな彼が、自殺する動機は？ 今回引き受けた不審死は全部、自殺と言うには決め手に欠ける。こんな曖昧なまま、忙しさを口実に真実が明らかにされないなんて許せないことだ。

「ヅカさん、これ全部調査するんですか？」

「うん。手伝ってくれる？」

一翔くんは、曖昧な笑みを浮かべて頷いた。

誰が、どうして、どうやって……あの捜査資料を読んでからの一週間、頭の中で疑問符が駆け回っている。一限の授業を担当している数学教師が何か言っているが、疑問符の間をすり抜けて行ってしまう。ヅカさんに頼まれた調査への動揺が、心臓の拍動を急き立てる。同時に、今回も僕の優秀さを示すチャンスが来たのだと、自分で自分を励ます感情も胃の底に溜まっている。とても不思議な感情だ、誰にも説明できない。

「……せのお、瀬野尾？ おい、大丈夫か」

「え……？」

気がつくと、目の前に数学教師が立っていた。眉頭がつり上がっているが目尻は垂れている、困惑と心配が混ざった表情だ。その表情のまま、チョークを持っていない左手で僕の肩を掴んでいる。

「瀬野尾くん、最近ぼーっとしてるみたいだけど、どうしたの？」

後ろの席の女子が不思議そうに語尾を上げた。どうした、と言われても答えようがない。僕の「これ」は、考え事とは本質的に異なる、僕だけに許された特殊な現象だからだ。

「冷や汗をかいてるようだし、本当に大丈夫か？ 体調、悪いんじゃないか」

「ああ……ええ、まあ」

曖昧な返事しか返さない僕を見かねた教師は、保健委員に命じて僕を保健室送りにした。まだ僕は半分自分の世界に体を漬けているから、白昼夢を見ているような気分だ。

それから少しして、ヅカさんが焦ったような顔で現れた。なぜ学校にヅカさんが？

という疑問が浮かんで、養護教諭が早退手続きがどうかと言っていたのを思い出す。さしずめ、迎えに来るのを面倒がった叔母からヅカさんに連絡が行ったという感じだろう。「一翔くん、大丈夫？　　ああ……ちょっと顔色悪いね」

行こうか、と言いながらヅカさんは僕の荷物を持ち上げる。誰が用意したのか、授業中は空っぽだったはずの僕のリュックはパンパンに膨らんでいた。ヅカさんの発達しすぎている上腕筋が、ワイシャツを破って出てきてしまいそうだ。「この前も体調崩したばかりだったもんな……無理させた、ごめん」

僕はまだ、動揺を相手に膠着状態にあった。だから、ヅカさんの謝罪には答えなかった。ヅカさんは、それ以上何も言わなかった。

この一週間、一翔くんと捜査資料を読みながら議論を交わす夜が続いていた。少し前に学校で発熱して早退したばかりなのに、さすがに無理をさせすぎたかもしれない。とりあえず瀬野尾くんを事務所のソファで休ませておいて、俺は聞き込みへ出ることにする。まずは、近場かつ事件の記憶も新しいであろう神應大学だ。

「外ノ池くんについてですか……入学して一ヶ月も経っていませんから、担任教官としてもちょっと、とにかく優秀な学生であるとか」

医学部医学科一年生の担任教官をしているという教授は、困ったように笑った。聞き込みの現場となった生協の学生食堂は、午前十時すぎという微妙な時間にもかかわらず、それなりに人が入っている。

「ああ、あそこに外ノ池くんと同じ高校出身のグループがいますよ。医学科の中でも目立つ一行なので、嫌でも覚えました」

「同じ高校出身のグループ？　友人ってわけじゃないんですか？」

教授は苦い顔で頷く。そして、彼らが外ノ池くんのことを若干嫉妬しているくらいがあるのだと教えてくれた。教授に礼を言って、派手そうな大学生グループに声をかける。「外ノ池くんのことで調査をしている探偵です。ちょっとお話いいかな？」

グループでも中心にいるらしい男子学生が、軽く頷く。皆、めいめいに飲み物を飲みながらPCで何か作業しているようだった。

「外ノ池は、典型的な優等生タイプです。先生とかに一発で気に入られるような」

「しかも、家が母子家庭だからお金がなくて、苦学生！　って感じだから同情も誘っちゃう」

「わかる！　しかもわざとらしく謙虚だから、うちらみたいなのからしたらウザいよね」

学生たちは口々に、外ノ池くんについて愚痴なのかなんなのか分からない情報を教えてくれる。乙宗くんの証言とは少し雰囲気が違うが、優等生・外ノ池将太のイメージは更に影を濃くしていった。

「俺らは必死で勉強して、塾の先生からめっちゃくちゃしばかれて、親にも散々口うるさく医者になれって言われてたのに、何かあるたびに大々的に褒められるのはあいつだけなんです。俺らなんて、家に金があったおかげで偶然医学科に受かった奴ら呼ばわりですよ。そりゃ、亡くなったのは残念ですけど……ちょっとくらい、ざまあって思う権利はあっても良くないですか？」

彼らの言う事は、確かに間違っていない。お金があっても無くても、努力したことに変わりは無いのだから蔑まれるべきではない。でも、外ノ池くんの死を少しでも喜んでしまうのは、人としてどうなのか？

「色々聞かせてくれてありがとう。忙しいところごめんね」

愚痴を言うことが出来てスッキリしたのか、彼らの顔は会ったときより少し晴れやかに見えた。こんな人たちが医師になるのかと思うと、少し背筋が凍った。

「あの……探偵さん」

帰ろうとしたとき、後ろから控えめに声をかけられた。振り返ると、グループの中でも一番目立たなかった女の子が本を握りしめながら立っている。

「どうしたの？」

「その……乙宗くんは、外ノ池さんのこと……崇拜、している節があるんです。だから、私の言う事は、乙宗くんと逆だろうから、信憑性が無いかもしれないんですが」

元から高くても細いであろう声は、さらに上ずって早口になっている。警察が最初に話を聞いた乙宗くんの証言と全く違うことを言おうとするのは、真面目そうな彼女にとってとてもプレッシャーなのだろう。

「うん、大丈夫。真っ向から否定したりしない、ちゃんとフェアに聞くと約束する」

彼女は、度の強そうな黒縁メガネの奥で少し目を見開く。少しして、決心したように口を開いた。

「私の弟は、外ノ池くんに乱暴されかけたことがあるんです」

頭を殴られたような衝撃が走る。確かに、これは警察に言っても納得されないだろうな。しかも、彼女は外ノ池くんに嫉妬しているグループの一員だから尚更だ。

「弟はその時、中学生でした。もともと、外ノ池さんは困ってる人に見境なく声をかける人だったんです。それで、弟は熱中症気味で座り込んでいるところに声をかけてもらって、外ノ池さんの家に入れてもらって……それで」

そこから先は声になっていなかったが、口に出せないという事実だけで、何があったのかを察するには十分だった。

三歳の女の子については、ほとんど情報が取れなかった。母親は娘なんてもうどうでもいいと吐き捨てたが、それは女の子を捨ててまで交際していた男に振られたせいだった。女の子は、「家から出てはいけない」という母からの言いつけを守っていたので、近所にも女の子をよく知る人間はいない。ただ、隣家の男子小学生から奇妙な証言があった。

「二月の初旬あたり……あの子の家から、キャッキャって笑い声がしたんです。誰かと、

おままごと遊びでもしている感じの」

その男子の母親は、「この子には妄想癖がある」と言って謝ったが、俺はそれを妄想だと一蹴することは出来なかった。

三月に見つかったカップルは、両家の両親が口を揃えて自殺なんてありえないと繰り返すばかりだったが、二人はそれぞれ建築学・言語学で博士号を持つ優秀な研究者だということだけは分かった。遺体があった元温泉旅館は、二人が式を挙げるはずだった結婚式場にほど近いとのことだった。死亡推定日も、式場で色打掛の最終確認をしていた。衣装合わせの写真を見たとき、なぜだか彼らはあの舞台が非常に似合うと思った。

元旦の男性についても、元同僚だという人から母親思いの真面目な人物であったことだけが聞けただけだ。誰に対しても親切で、特に自身が貧困のために空腹だった記憶から、お腹を空かせている人には特段優しくかったのだそうだ。

一連の調査結果を聞いて、一翔くんはまたぼーとした表情になった。ソファに横になったまま、まだ顔が蒼い。そういえば、二週間前もこうだったな、と思い出す。それこそ、外ノ池将太の死亡推定日のことだ。あの日も、学校を早退して奥の部屋で寝込んでいた。

「ねぇヅカさん……今日、泊まっていい？」

「もちろん」

このやり取りは、ほとんど反射で交わされている。一翔くんは色白で華奢な見た目通り、少し体が弱い。そのせいで、高校一年生を一度留年している。厳しすぎる両親のこともあり、その時はグレかけて何度か警察沙汰になった。その時少年課と関わりが深かった漆田の紹介で、俺と知り合ったというわけだ。今は両親とは別居で叔母さんと二人暮らしをしているが、叔母さんとも折り合いが良くなく、週に半分は事務所に泊まっている。

「一翔くんはいつも通りそっちの寝室使ってくれ。あと利保ちゃん、申し訳ないんだけど洗濯物取り込んでもらえるかな？ 雨が降りそうだ」

PCのシャットダウンを終えて出ていこうとする利保ちゃんが踵を返す。これもよくあることなので、特に不満そうな様子はない。

「いいですけど、鎧塚さんは何するんですか？」

「俺？ 筋トレ」

利保ちゃんが洗濯かごを抱えたまま呆れた顔をした。

「童顔にマッチョボディがくっついてるの、本当に気味が悪いですよ」

「そうですねよヅカさん……顔か体かどっちなんとかないですか？」

「ならないですねえ」

筋トレは警察官時代からの習慣で、これもまた俺を「正義側の人間」だと実感させてくれる行為の一つだった。だから、簡単には辞められない。俺の童顔とマッチョ体型の不釣り合いさについての問答も、うちの事務所じゃいつものことだった。

日付が変わる頃、利保ちゃんが洗っていつてくれたティーカップを棚に仕舞っていた。スズランの柄が、サクラ柄の隣に整列する。これは、利保ちゃんが「季節を大切にするのは文化人の基本です」と言って買い揃えてくれたものだ。月ごとに描かれているモチーフが異なる。

「ん……？ 月、ごと？」

最初に漆田から話を聞かされたとき、胸の中に違和感が広がった。それが、今は大きな石みたいになって俺の胸を占めている。そうだ、俺は「複数の不審死」というワードに引っかかったのだ。これは、なんだか続いているような、関連というかルールのあるものなような気がしていた。このティーカップのように、月ごとにモチーフを決めて描かれたような、そんな予感だ。

「明日あたり、一翔くんに話してみよう」

ただでさえ武闘派の俺が、眠い状況で頭脳戦を行っても良いことは無い。とりあえず眠ってしまうことにした。

翌朝、一翔くんの高校に欠席連絡を入れる。昨夜もほとんど食事を摂れていなかったし、学校に行ける状態とは到底思えなかったからだ。

「一翔くん……入るよ？」

まだ眠っているようだったが一応ノックをして、部屋に足を踏み入れる。隠居した師匠が使っていたベッドに、一翔くんの細い体が横たわっている。窓際の学習机に目をやると、高校の教科書や筆箱と共に、可愛いポーチが置かれていた。利保ちゃんが使っているのを少し目にしただけだが、ファスナーからはみ出しているそれらが化粧品であることは分かった。一翔くんは美意識が高い方だし、メイク男子なんて言葉があるくらいだから珍しいことでもないか。

「一翔くん、学校に欠席連絡入れといたよ」

「んう……はい」

起きているんだか寝ているんだか分からない返事だが、とりあえず体調を確認しようと歩み寄る。その時、ベッドサイドの机に文庫本に紛れた「よく分かるフィジカルアセスメント」という参考書があるのが目に入った。一翔くんは理工学系、しかもロボット工学を志しているのではなかったか？ 少し変だと思って手にとると、目次には痛みや吐き気などの苦痛を患者の表情や様子から推察するなどといった看護師向けの情報が並んでいる。母親と同じケア職はごめんだと何度も繰り返していた一翔くんが、なぜ？

「ヅカ……さん？」

一翔くんの色のない唇が動いた。珍しく、縦にひび割れている。

「わ、ごめん、起こしたね」

反射的に、その本を投げ飛ばすようにして手放す。一翔くんの切れ長な目が、俺をしつかりと捉える。顔色は昨夜と変わらないが、涙の跡が目尻のくぼみの形で残っていた。

昨夜急に思いついたんだと言いながら意気揚々と話すヅカさんを、僕はただ呆然と見ていた。ヅカさんは典型的な脳筋かと思ったけど、ちゃんとエンジンをかけて考えると思考を紡ぐことが出来るんだな、と感心にも焦りにも似た感情が湧き出る。ダメじゃないか、先を越されちゃ。僕の、僕の優秀さを示すためにここに居るのに。

「じゃあ、不審死は一連のもので、何か意図をもって行われたってことですか」

「そうじゃないかなって、思ってる」

ヅカさんは、ベッドで半分体を起こした僕にほほえみかける。その瞳は、いつも通り正義を貫いてやるんだという熱意に燃えている。そう、その目だ。その目に惚れたんだ。「それで、今日は現場を見に行こうかなって」

「僕も行きます」

これはほとんど脊髄反射で答えていた。ヅカさんは病み上がりだからと制したが、僕はそんなことで引き下がるつもりはない。

「わかった、具合悪くなったらすぐ言えよ」

結局はヅカさんが折れる、これは想定内だった。

外ノ池将太のアパートは、鑑識作業も終わってほとんど綺麗になっていた。明後日にはご両親が荷物を引き取りに来るらしい。漆田のコネで、規制線を超えることは許されていた。

「何も無い部屋だな」

第一印象は「独房」だった。机に載ったコーヒーの跡があるマグカップ以外、生活感を感じさせるものが無い。死ぬことを見越して物を減らしていた人の部屋だと言われたら、納得してしまいそうだ。

「ゴミ箱、ほんとにカフェイン剤が入ってるね」

折りたたまれた状態の空箱が、空のシートと共に三枚捨てられている。それ以外のものは、レシートが入っているくらいで特に何も無い。ふと、ゴミ箱のすぐそばで口を縛られた状態で落ちているゴミ袋が気になる。他のゴミ袋たちはキッチンの奥にまとめられていたと報告があったからだ。少しためらったが、固く縛られたゴミ袋を開く。

「色々入ってるね。絆創膏、コットン、胃薬……」

それらの箱は、折られていない状態で立方体のまま詰め込まれていた。一翔くんはそれを見て、また考え込むときのモードに入ってしまった。

三歳の女の子の民家も、ほとんどそのまま残されていた。規制線は無いがライフラインは切断されていたので、冷凍室の中の雪は融けて水になっていた。

「これが、セイヨウヒイラギか……ヒイラギって、そういえば節分飾りにも使われるよな」

「え、あーでも、ヒイラギっていう名前はクリスマス時期に使われるノコギリに由来してますし、実も十二月に成るんですよ」

一翔くんは流暢に答えた。ヒイラギの実は、十二月に成る？　なら、二月に隣人の男の子が聞いたという笑い声は？　検死結果は？

「室内に置いてあったなら、結実が遅くなることもあるでしょうけどね」

信頼するワトソン……相棒のその言葉に、俺は納得することにした。

カップルが見つかった現場は、豪華な旅館跡だった。舞台を目にしたとき、何だか既視感があるなと思った。

「ここに、農薬成分の残った小瓶が二つ転がっている。二人の車は、この近くの林道に停まっていた……。中からは、衣服が見つかった」

「衣服っていうか、下着ですね」

わざと濁したところを、一翔くんが言い直す。おそらくは、亡くなる直前に車で情事に及んでいたと思われるというのが、法医の見解だった。

元旦の現場は、ほとんど人が来ない神保山頂上であるということもあり、四ヶ月ほど経っているのにまだ規制線が張られていた。

「雪に足跡をつけずに歩くななんて、無茶だよな……」

それこそ、見晴台にずっと潜伏していたとかそういう手段でもなきゃ無理だ。大晦日から元旦にかけてはかなり気温が低かったし、大雪が降っていた。山に登れるくらいの天候になったのは、元旦四時ごろのことだ。

「まあ低い山ですし人もほとんど来ないようですから、足跡は残りそうですね」

神保山は、山というよりは丘と言う方が正式なのではないかと思えるほど低い。三十分くらいで登頂可能だから登山者の遺体が発見されたことには何ら不思議はない。しか

し、ストックで自分で喉を突くなんてことは可能なのか？　でも、登山者がいるかどうか分からないのに極寒の中潜伏していることだって難しいだろう？　ストック自殺にしろ、極寒潜伏にしろ、それが出来た人物が居たとしたらかなり執念というかそういうものを感じる。執念というより、正確には強情さだ。ちょうど、子供がおもちゃをねだるときのような。

「ヅカさん、帰りませんか」

何も言わず考え込む俺に、一翔くんが声をかけた。低いとはいえ山頂だから、平地より肌寒い。これ以上一翔くんは無理をさせてしまう前に、帰るのが賢明だろう。

「そうだね、帰ろうか」

一翔くんの表情が、少し緩んだような気がした。

帰り道も、俺は思考を巡らすのを止められなかった。俺にとってはとても珍しいことだ。喫茶店やレストランが立ち並ぶ路地は、そのほとんどが半永久的にシャッターを閉めてしまっていた。

「やっぱり、これは続きモノだと思うんだ」

隣を歩く一翔くんが、固まった表情でこちらを見る。彼の頭の中では「続きモノ説」は早々に棄却されてしまっているのかもしれない。俺は自信を失いつつも話し続ける。

「一月の遺体は、初日の出を浴びながら亡くなる。三月の遺体は、ひな壇の一番上……そう、お雛様とお内裏様のポジションで亡くなっている。四月の遺体は、新生活を始めたばかりの大学生、しかも部屋の大きな窓からは桜が見える……」

言いながら、自分で気がつく。俺があのカップルの衣装合わせ写真を見てひな壇が似合いだと思ったのは、三月・着物・日本髪などの要素から無意識にひな祭りを想起していたからだ。

「三歳の女の子は、二月頃に笑い声が聞こえたという証言がある。ヒイラギは、二月の節分飾りに使われている。雪と一緒に冷凍室に詰めたのは、発見を遅らせるためかもしれない」

すべてが、その月を象徴するような人物・シチュエーション・殺害方法だ。こじつけと言われればそれまでだが、偶然と言うにはちょっと出来過ぎだ。

「一翔くんはどう思う？　いや、こじつけ臭いよね……自分でも分かってる。でも、これらがただの不審死で自殺だなんて結論されるのは見てられないよ」

一翔くんは俺の話を聞いているのかいないのか、自我の無いロボットみたいにまっすぐ歩き続ける。俺はますます自信がなくなって、目はくたびれた革靴を捉える。

「犯人は？」

「犯人は……まだ情報が足りないけど、たぶん頭がいい人なんだと思う。それで、自分が優れているってことを表現したいんじゃないかな。俺にはその気持ちはわからんけど、一翔くん、前にそういうこと言ってたじゃん、優秀さを示すために推理してるって。犯

人の気持ち、ちょっと分かるんじゃない？」

そう言いながら向き合った一翔くんは、軸を失ってフラッと路地裏に体を吸い込まれた。

「大丈夫!？」

一翔くんを支えようと追いかけて、その勢いで路地裏に入り込む。薄暗い路地裏で一翔くんをしゃがませようと体を掴む。青白い顔、冷たい身体。その時、ふと頭の中に一つの考えがよぎった。

「……ねえ一翔くん」

言いたくない。信じたくない。人をむやみに疑うような真似はしたくない……いや、一翔くんだけは疑いたくない。

「あのさ……その」

でも、真実を明らかにしたい。この考えが正しいなら、外ノ池くんを確実に殺せる人間がいる。その人の部屋で、薬を粉碎するツールを見たことがある。彼の細い喉では錠剤を飲むのが辛いからと言っていたのを、昨日の事のように思い出した。

「そっか、分かっちゃったんですね」

知らない声だと思った。でもそれは確かに、一翔くんの声だ。俺が信じたくないだけで、彼の声だ。これが続きモノだとすれば、外ノ池くんを殺した犯人＝他の被害者も殺した犯人になる。子供のおもちゃ遊びみたいに、欲求のまま地団駄を踏むような形で行われた殺人。優秀さを示したいという、あまりに身勝手な動機によって作られたシチュエーションたち。外ノ池くんの医学生としての善意、それは確かに歪んだ欲求を孕んでいただろうが、その善意を利用した。そして、三歳の女の子の寂しさ、研究者カップルの純愛、苦労した過去を持つ登山者男性の同情……全部を利用した。そんな冷酷な殺人者だ。

「分かったんだったらいいや、そう。仮病です、仮病。僕は生まれてこの方数えるくらいしか風邪を引いたことがない健康優良児ですよ」

「嘘だ」

口から出た言葉とは裏腹に、頭には証拠が浮かぶ。必要無いはずのフィジカルアセスメントの参考書、赤みを抑える機能のある化粧品、何か上から塗ったようにひび割れた色のない唇……そして、都合の良すぎるくらいに体調を崩すタイミングの良さ。そもそも、一連の犯行のときの一翔くんのアリバイは、ほとんど体調を崩して寝込んでいたことに由来する。それなら、その体調不良が仮病だったとしたら、それは全部……いや、一翔くんは人を殺せるような人間じゃないはずだ。興奮している容疑者の前からは走って逃げるべきなのに、俺はその場で考え込むのを止められなかった。

「そういうことです、ヅカさん。いや、鎧塚聡『元』 巡査部長。上層部が、役持ちの人間の犯罪を握りつぶすのが許せなかった。重大事件に因らわれて、自殺判定にされる不審

死が許せなかった。その情熱が、真っ直ぐすぎる正義が、あなたを警察官の立場から引きずり下ろした。それでも尚、安養寺利保の父親から出資を受けてまで探偵業を行って正義にしがみついている哀れな敗者だ……。そして今！　あなたはその正義のために僕を疑うのを止められない！　僕の優秀さを担保することを、止められないんだ！」

やめろ、やめてくれ。俺の正義は、君みたいな不運な子を助けるためにあったはずなんだ。

「一翔くん、今からでもやり直……」

言いかけたところで、下っ腹が熱くなった。白くて細い綺麗な手が、俺の身体に差し込まれた何かを力いっぱい引き抜く。赤く光るそれが刃物だと気づくのに時間はかからなかった。右の下腹部から血が、おびただしい量の血が流れ出る。脳筋の俺にだって分かる、どんなに急いでももう助からない。

「ばかだね」

五月末の熱い西日に似合わない、うんと冷たい声だった。でも、その通りだと思った。俺を見下ろす顔が、切れ長の目が、流れるような黒髪が、初対面の元相棒をかたどる。

倒れ込んだ視界に、建物の中から青空が見える。

晴天の日の白を束ねたような光が、硝子体の奥を焼き溶かさんばかりに照らしていた。

晴れ間のエゴイスト/大木田悠琢

晴れ間のエゴイスト/大木田悠琢

晴れ間のエゴイスト

大木田悠琢

今から僕がしようとする事は悪いことか。

それによって、傷つく人は、涙を流す人は、いないのか。

僕は、僕の心に問いかける。

いや、これは悪いことではない。救済だ。

誰かによる、誰かのための、救済なのだ。

そして、僕は――。

その日、久々に僕たちは眩いほどの太陽の光を見た。

ここ数日間長らく続いていた雨が、週も半ばを過ぎた木曜日に止み、朝から空に晴れ間を見せていた。

昼時に、そんな晴れた空を窓の向こうに見ている、そんな時だった。

「みんなってさ、楽単って興味ある？」

僕と宮坂が、山添にそう聞かれたのは。

初修外国語のクラスが一緒だという理由で、大学に入学して初めて僕が知り合ったのが宮坂と山添だった。二時限目の終わり、大学構内の学生食堂が最も混雑する時間帯に、腹をすかせた僕たちは何とか空いている席を見つけたのである。

「楽単って、いわゆる楽に取れる単位ってやつ？」

山添に真っ先に答えたのは、僕ではなく宮坂だった。

「興味あるに決まってんじゃない。楽しんで単位稼ぐ、これ大学生の鉄則ね」

「まだ一年目だろ。桂木は？」

「あまり興味ないな」

「相変わらずまじめだねえ、桂木は」

僕はそっけなく答えて目の前の小鉢に箸を運んだ。宮坂と山添は二人そろってカレーライスを口いっぱい頬張りながら話を続ける。

「それで、どうしたの？ 急に楽単なんて」

「いやね、ボート部の先輩から楽単リストってやつもらってさ」

「マジ？ ちょっと見して」

ちなみに言えば、山添はボート部、宮坂はバドミントンサークル、僕は文芸部。ただ授業が一緒というだけで近づいた三人だから、たいした共通点もない。もちろん、授業や日常で会話できる知り合いができたことは非常にありがたいのだが。

山添はラインアプリを開くと、一枚の写真を開いて、スマホをテーブルの真ん中に置いた。

「これ全部、Gコードだから俺らでも取れる」

Gコードとは、いわば総合科目の講義を示す名前。学部を指定する講義は特定の学部生しか選択できないのだが、総合科目のGコードなら、人文学部生の僕たちも、どの学部生でも自由に受講できる。

「へえ〜結構あるんだね。うわ待って、この日本古典取ろうか迷って結局取らなかったやつだ。なんだよ、とっときゃよかった」

宮坂がさっそく声を上げる。僕もちらっと覗き見た。

〈……日本古典（火3）、芸術史概論（火4）、環境形成論（水2）、数学基礎（水5）、日本国憲法（木4）、人文学概論（金4）……〉

ちらっと見ただけでも五十は優に超える数の講義名とその開講日が記されていた。

「結構あるでしょ、これ全部楽単らしいよ。」

そもそも出席を取らないらしい。だから、欠席も遅刻も早退も自由。簡単なレポート

とかやったら単位ももらえるんだって。

それにこっちはオンラインだから、先生の話をつただきとくだけで、毎回三十分は早く終わるらしい」

「まじで。いいなー、俺の授業なんかマジきついよ」

二人がその写真に夢中になって話し続ける中、僕は一人心中で思う。

楽単に何の意味があるのか。大学たる所以の学問を軽んじて、一体何が残る？ 何も、何の学びも残らない。

僕は常々思っていた。せっかく大学に入ったのに、学ぼうとする意欲が全く感じられない人が多いすぎる。

そう思うのは、僕の傲慢だろうか。

「マジ楽単取りたい」

「じゃあさ、二学期からみんなで楽単取ろうよ。ほら、この日本中世史とかどう？ これ二学期から開講だよ。これ取ろう」

「いいね。そうそう、この日本中世史がオンライン授業らしいのよ」

「ちょうどいいじゃん、そうしようぜ」

黙々と箸を進めていた僕に、山添と宮坂が問いかける。

「バカじゃないの、ちゃんと取りたい授業も選ぶし、もしその授業取ったとしたらちゃんと受けるよ。」

「いいね、そうしよう」

友達付き合いは大切だ。

時に自分の意思を飲み込んででも守る価値は、今のところはある。

「この後、三限と四限に授業入ってるんだ」

僕は食堂前に立ち止まって、帰ろうと足を進める二人にそう言った。

「なんだっけ、教職入門だっけ」

「そうそう。一応、教育免許は取っておきたいから」

「えらいね～、桂木は」

「俺、二時間連続の授業なんて耐えられないもん」

山添と宮坂も立ち止まって、少し立ち話をする雰囲気になった。

「俺はこの後バイトの面接」

「大変だね～。俺は家でゲームでもするわ」

「っじゃ、みなさんそれぞれ頑張りましょうということで」

山添が立ち止まった割には雑な話の切り方をした。

「じゃあね桂木。また明日」

「じゃあね」

二人が手を振りながら立ち去っていく。

「じゃあね」

と僕も手を振る。一応、彼らの背中が見えなくなるまで、僕はその場に立っていた。

僕には、何もない。

そう自覚したのはいつだっただろう。

ずっと前だった気もするし、最近である気もする。

けれど、ついに僕がその自覚を知り受け入れたのは、大学受験の時だ。

それなりに、努力し、それなりに、夢見ていた、前期の大学受験に、僕は落ちた。さも当たり前かのように、合格通知が届かず、ネット上の発表画面に僕の受験番号がないのをみた時のことを、今でも鮮明に思い出せる。

時が止まったような気がした。そして、このまま人生が終わってしまえとも思ってしまった。

その感情、後悔と悲しみと恥辱とが入り混じった感情を、僕がようやく整理して、後期受験に気持ちを向かわせられたのは、いつ頃だっただろうか。先生と、そしてその頃の僕が最も会いたくなかった両親と、話し合いとも説教とも言えないような会話を重ね、ようやく後期に受験する大学を決めた。そして、後期受験日の少なくとも一週間前には、先生に小論文の添削を依頼していたことは覚えている。

後期では夢すら見ることも努力することもなく、判定で長らくAを取れていた大学を選んだ。

その時だった。僕が何も持たないことを自覚したのは。

これまでの学問に関する自分への信頼は、全て傲慢だった。犬も猫も喰わないような、箸にも棒にもかからないような、そんなものだった。

「……学校教育の大きな変化の一つが、道徳の教科化です。これによって、それまでの教科指導とはまた違った指導を、学校は求められることになりました」

教職入門のレジュメを見ながら、ぼんやり考えていた僕は、窓側から聞こえる雨音に気を取られた。

頬杖をつきながら窓のほうを見る。雨が、降っていた。

ここ数日ぶりに晴れたと思ったらこれだ。また当分、湿気に悩まされる日が続きそうだ。窓を伝っていく大量の雨粒をみながら、僕は少し顔をしかめた。

三限の授業が始まって半分を過ぎた、13時半ごろのことだった。

「それでは今日の授業はここまで。感想レポートは学務システムで明日までに提出お願いします。では、お疲れさまでした」

僕はその言葉を聞いて大きく背伸びをした。時間は16時5分、四限終わりの5分前だ。窓の外からはまだ雨の音が聞こえる。

「ようやく終わった」

「この後は？」

「俺は部活。お前はバイトだろ」

「ってか雨降ってんじゃーん」

そう口々に言いながら、さっさと部屋を出ていく学生たち。授業が終わる前から後ろでバタバタと音を立てていたから、彼らはきっと早々に帰る準備を整えていたのだ。

僕は帰る準備をし終わると、スマホを起動して通知画面を見た。新着やめばしい通知はなかったが、ここ数日の間、あるアプリの通知が多く届いていた。それは文芸部で使っているトークアプリだった。

【『はたおり』の第一稿が完成しました。PDFの確認をお願いします。】

【なにも修正点がないようなので、このまま印刷を頼みます。】

【印刷会社さんから完成したと連絡が来ました。確認のために三冊送ってくださるそうです。】

文芸部二年の中江先輩からの連絡だった。教育学部の彼女は編集係長をしていて、文芸部が発行する部誌『はたおり』の編集長でもある。

中江先輩からの最新の通知は、昨日の16時過ぎに届いたものだった。

【届きました。部室で保管しておきます。明日の部会で確認をお願いします。】

その言葉と一緒に、部室の長テーブルに置かれた三冊の冊子を映した写真が添付されていた。冊子の表紙にはレトリックな書体で『はたおり』と記されている。

文芸部の部会は毎週月曜日・木曜日に行われていた。普段の部会は、集まって執筆の進み具合をお互いに確認したり、好きに読書したりするだけだから、基本的に参加は自由。だが時折、お題を決めて時間内に小説を書いたり、小説を読みあったりと、文芸部らしい活動もあるから僕は基本的に参加するようにしている。

今日の部会は、どうやら『はたおり』の確認をするらしい。部会は17時からだから、それまでに部室へ行こう。

この後の予定を決めた僕は、時間まで図書館で時間をつぶすべく、教職入門を受講していた部屋を出た。

図書館は、Gコードの授業が行われる総合教育棟のすぐ近くにあり、屋根付きの通路でつながっていた。総合教育棟で教職入門を受けていた僕は、その通路を歩いて図書館へ入った。

静かな図書館、かすかに勉強している人たちのパソコンのキーボードを打つ音が響く中、僕は読みたい本を見繕っていた。そしていつしか、時間は17時15分になっていた。この大学は敷地が広い、場所によっては、歩いて20分以上もかかるくらい距離が広がることもある。

図書館から、文芸部の部室がある部室会館もそれくらい離れた場所にあった。走れば10分もかからずに行き来できるだろうが、こんなことで疲れたくはない。15分くらいか

かってしまうだろうが、歩いていけば部会に間に合う。

僕は図書館を出て、部室会館に歩いて向かった。

雨はもう、止んでいた。

走りの練習をする陸上部や派手な髪形をしたバンドサークルとすれ違いながら、歩くこと十五分弱、僕は部室会館に着いた。ロビースペースのホワイトボードで、文芸部の部室の使用確認欄に丸がついていることを確認して、僕は部室に向かった。

「おつかれさまです」

ドアを開けて挨拶をしながら入る僕。

「ああおつかれ」

「お疲れ様です」

部屋の中で僕を迎え入れたのは、尾道先輩と中江先輩の二人だけだった。ああやっばりな、と僕は思う。

トークアプリの参加人数を見る限り、文芸部の総部員は十数人いるはずだが、僕が見ている限り、部会に毎回参加しているのは僕を含めて五人だけだった。それも仕方ない、文芸部はそもそも読むのが好きな人と書くのが好きな人に分かれる。さらに、書くのが好きな人も、部活としてではなく趣味として書けばいいのだから、わざわざ部会に顔を出す人は少ない。兼部やバイトをしている人も多いから、部会の参加率はいつも半分といったところだ。

そんな中で、毎回出ているのが五人だった。僕と、二年生の尾道先輩、中江先輩、三年生の成瀬先輩、そして加藤野先輩だ。

工学部二年の尾道先輩。他にゲームサークルも兼ねているそうだが、そこはうまくやっているそうだ。彼はめったに筆は持たず、主に読むのがメイン。高校時代は水泳部に入っていたそうで、体つきがいい。

教育学部二年の中江先輩。部誌『はたおり』の編集長であり、彼女自身も小説を書き、その設定の作りこみの丁寧さは、部内でも一目置かれている。普段から丁寧で優しい人柄の先輩だ。

教育学部三年の成瀬先輩。文芸部の現部長で、よく長編物の小説を書いている。ただ、最近はバイトや就活に忙しそうだ。五人の中では唯一、眼鏡をかけていて、それをくいと動かす癖が印象的な先輩だ。

そして最後の一人、加藤野先輩はすごい。

人文学部三年で、多趣味・博識の先輩。彼は他にもいくつか部活をかけ持っていて、か

つ美意識も高いという徹底ぶり。何より、文芸の才能がとびぬけている。

これは成瀬先輩や尾道先輩から聞いたことだが、加藤野先輩は過去にいくつかの公募コンテストで成績を残している。心象風景を緻密に描き抜く鮮やかな言葉選びが高く評価されているそうだ。

そんな四人と、人文学部一年の僕・桂木が、現在の文芸部ではほぼ毎日顔を出しているのだ。ちなみに僕は、中学校ころから趣味で始めた小説書きの延長として文芸部に入ったわけで、三か月に一本くらいのペースで短編小説を書いている。

部室に入った僕は、中にいた尾道先輩と中江先輩の顔を見て驚いた。ひどく暗い顔をしている。なにかあったようだ。

「どうかしたんですか」

僕の問いに、二人は顔を見合わせてから尾道先輩が話し出した。

「いやあ、ないんだよ。『はたおり』の見本冊子がさ」

険しい顔でそういった尾道先輩が指し示す先には、何も置かれていない長テーブルがあった。

「え、どういうことですか」

僕はあわててスマホのトークアプリを見返す。中江先輩があげた写真では確かに長テーブルの上に見本冊子が三冊あったはずだ。

「確かに昨日、私の自宅に届いたものをここまで持ってきたはずなんです。それで学校にいた部長に連絡して部室を開けてもらって、このテーブルの上に置いて帰ったんです」

「それがなくなってたってわけだよ」

二人がそう言っても、僕は全く訳が分からない。昨日、中江先輩が持ってきて、成瀬先輩が見ていた中で置いたはずの冊子がなくなったのだ。

「中江さん、部長には連絡したんでしょ」

「はい。さっき既読も付きました。バイトが終わってこちらへ向かってる途中だそうです」

中江先輩がスマホを見返して答える。

「ちなみに他の人たちは？」

「みんな今日は休み。来るのは俺と中江さんと、桂木君と部長と、加藤野先輩だけだ。ま、加藤野先輩は木曜日は五限あるから、今日の部会も遅れてくるだろうけど」

いつものことだと言わんばかりに尾道先輩が答える。

「じゃあ、このことを知ってるのは現段階では、僕たち三人と部長だけってわけですか」

「ま、そうなるけど。にしても、問題は どうして冊子がなくなったのかだよ」

尾道先輩が何もない長テーブルを見つめて言った。それにつられて、僕と中江先輩も長テーブルに目を取られる。

「誰かが盗んだんでしょうか」

中江先輩がボソッと言った。思わず僕が二人の顔を見ると、中江先輩は不安そうな顔をしていたが、尾道先輩はどこかうれしそうな顔をしていた。

「ミステリーだね」

「そうですね」

僕だって小説は読んできているし、その中には推理小説もあった。こういう状況に憧れを持ってしまうのは、いつまでも大人になり切れない男子の性というものだ。

「そんなこと言ってる場合じゃないですよ」

唯一中江先輩だけが不安そうな顔のままだった。

その後、僕たち三人は部室の中の本棚を探していたときだった。

「お疲れ。冊子の件、一体どういうことだ」

ドアを開けて早々、成瀬先輩が声を上げる。息を切らせているところを見るに、バイト先から急いでやってきてくれたらしい。

「なくなってたんです。昨日ここに置いたはずなのに」

「本当にないのか、この部室のどこにも？」

「はい。本棚の中も探しましたが、ありませんでした」

尾道先輩がそう言って本棚の中の段ボール箱を持ち出した。ここには過去の『はたおり』がしまっている。

「どうでしょう」

「どうしようも何も、一体どこにいったのか見つけないと。だって、昨日確かに、ここに置いたよね。僕もそれを見ていた」

「ええ、置きました」

「だよね。僕もそのあと、部室の鍵は確かに閉めたはずだ」

中江先輩の説明に成瀬先輩も頷く。

「いったいどこへ行ったんだ。今回の『はたおり』は、今度の学園祭でも出すやつだから、厄介なことになったらまずいんだけどな」

「厄介なことって」

「もちろん、警察問題だよ。もしこれが盗難だったら、部室の管理問題になるからね。内輪でうまく解決しないと」

成瀬先輩はショルダーバッグを下ろして椅子に座ると、さっそく眼鏡をくいと動かした。

「見本だからきっとデータは業者さんのほうに残っているだろうから発行には問題はないだろうが、このままではいかないだろう。」

問題は、誰がどうして、そして、どうやって、冊子をこの場から消したのかだよ」

ミステリーらしくなってきた。僕も思ったし、きっと尾道先輩や成瀬先輩も、そのワクワクは心のどこかでは感じているに違いない。相変わらず中江先輩だけが不安そうな顔をしていた。

その時、ドアが開いた。

「お疲れ様」

部屋の中の重苦しい空気とは正反対の、爽やかな声が部屋に響いた。

「成瀬が走るのが見えたけど、やっぱりちょうど来たところだったんだね」

ドアに立っていたのは、茶色がかった髪を右手で掻き上げている高身長の学生。

「何より成瀬、お前の眼鏡が曇ってる。走ってきたときにかいた汗のせいだろ」

「なんでお前はハナから探偵みたいなしゃべり方してるんだよ。加藤野」

「部屋の外で聞こえたんだよ。成瀬たちの話が」

遅れてきたのは、加藤野先輩、その人だった。

「加藤野先輩、お疲れ様です」

「お疲れ、中江さん」

「お疲れ様です」

「尾道くんもお疲れ」

尾道先輩と中江先輩も立て続けて挨拶する。二人とも、どこか憧れの視線で加藤野先輩を見ている。それもそうだ、この文芸部の中では今のところ、加藤野先輩の文章力が一番評価されているのだ。

「お疲れ様です」

「桂木くんだっけね、お疲れ」

僕も加藤野先輩に笑顔でそういわれて思わず嬉しくなる。この人には、どこか人を引き付ける魅力がある。

「最近湿気酷いよね。中江さんも大丈夫？」

「いや、大丈夫だと思いますけど」

「日焼けもそうだけど、肌ケアで気にしなきゃいけないのは乾燥もだからね。梅雨の時期は肌の乾燥に気づきにくいから。」

あ、そうそう、尾道くんさ、この前バイトしてるの見かけたよ」

「え、マジすか」

「うん。けど尾道くんは厨房担当でしょ、だから多分僕のことは気づかなかったんだろうね」

「そうかもしれないっすね」

「えーでもさ……」

「ごめん加藤野。今はそれどころじゃない。話を聞いていたのならわかってるだろう」

爽やかに部員に声をかけていた加藤野先輩を成瀬先輩が止めた。

「もしかすると、これは盗難案件だ。我々の管理不足を疑われる。それがまずいのは、お前もわかってるだろう」

「まあね、最悪部室取り上げ案件だ」

僕は思わず声を上げた。

「そんなに大変なことなんですか」

「もちろん。ここはあくまで大学の施設だ。それを文芸部の僕らが使っていて、鍵まで僕らに預けてくれている。それでもし、鍵の閉め忘れとかがあったら、大学だって黙っちゃいないだろう」

加藤野先輩がそうさらっと答える。

「だから、どうにかしないといけないわけだが。どうする、部長さん」

加藤野先輩は成瀬先輩の背後に回ると、その肩に手をついた。

「どうするも何も、内輪でうまく解決するしかないだろう」

「そうだね」

「そうだね、って、お前が一番の被害者だろう」

「どうして」

「どうしてって、今回の『はたおり』にはお前の例の小説を載せたじゃないか」

成瀬先輩の言葉で、部室の雰囲気は急に少し重くなった。

「そうでした。加藤野先輩、大丈夫ですか」

「あれが今回の目玉ですもんね」

さっきまで明るい顔をしていた加藤野先輩は、少し悲しそうな顔をした。

「ああ、そうだったね」

うまく話をつかめない僕は四人の顔を見渡した。その僕を見て、尾道先輩が耳打ちしてくれる。

「この前、加藤野先輩がコンテストで入賞した小説を、今回の『はたおり』に載せてたんだよ。トップバッターに据えてね」

「コンテストですか。すごいな」

「すごいよな、ほんと。小説の題名は確か……」

「『梅雨のエゴイスト』だろ。な、加藤野」

僕と尾道先輩の話を聞きつけて、成瀬先輩が話に入ってきた。

「ああ、そうだよ」

加藤野先輩が頷く。

「そうそう、それっす。俺、まだ読んでないんですよ。マジ今日楽しみにしてたんですよね」
「僕と中江さんは編集のチェックの時に読んでるからね。あれはすごかったぜ。加藤野の良さが詰まってる」
「ええ。私も、やっぱり加藤野先輩の小説大好きです」

尾道先輩が悔しそうに言ったのに対し、成瀬先輩と中江先輩は目を輝かせて言った。
「お褒めにあずかれるなんて光栄だよ」

加藤野先輩は恭しく一礼した。

「けど、今はそれが読めない状況なんだよ。見本がなくなってしまったんだからね」
「今日って、鍵はどうしてたんですか」

僕は四人に聞いた。四人は数秒間顔を見合わせると、成瀬先輩が話し出した。

「いったん、そこを整理してみようか」

そして成瀬先輩は僕のほうを見ると、

「桂木君への、この部活の鍵管理の方法の説明も兼ねてね」

「あ、ありがとうございます」

急に名前を出されて僕は驚く。その様子を見た加藤野先輩は、今度は僕の背後に回った。

「そんな固くなるなよ、桂木くん」

「いや、すみません」

憧れの加藤野先輩に言葉をかけられ、僕の顔もほころぶ。

「いいかい、桂木くん。この部活では、部室の鍵は基本は部長の成瀬が管理している。だよな、成瀬」

「ああそうだ。代々部長が管理していて、部会の時とか、何か物が必要な時は、僕が鍵を使って開けている。もちろん部室の鍵は、家の鍵とかと一緒に厳重に保管しているよ。」

けど、どうしても僕がいけない日や時間もあるから、そういう時は誰かに鍵を預けて部室を開けてもらうようにしている。

実際、今僕は鍵を持っていない」

成瀬先輩がそう言うと、中江先輩がポケットを漁ると鍵を取り出した。よくある形状の鍵に、ネームキーホルダーがついたものだ。キーホルダーには【文芸部 部室】という名前シールが貼ってある。中江先輩はそれを長テーブルの上に置くと、
「今は私が持っています。加藤野先輩から預かりました」

「そうだ。僕が成瀬から預かって、中江さんに渡した」

加藤野先輩がそう頷くと、尾道先輩が口を開いた。

「それはどういうことっすか」

「うーん、そうだな。そこから説明しようか」

加藤野先輩は成瀬先輩と顔を見合わせてそう言うと、今度は成瀬先輩が話を続けた。
「初めは僕が鍵を持っていた。今日は一限と二限に授業があったんだが、午後1時からバイトが入ってたんだ。だから、昼休み途中までは友達と一緒に行動してたけど、12時半ごろには友達と別れて大学を出なくちゃいけない。

その時に、加藤野が鍵を預かろうって申し出てくれたんだ」

「ああ、僕から言い出した。もともと、成瀬が今日バイトだってことは知っていたから。バイト先に鍵を持っていかれたら、それこそ大変だ。

ああ疑われないように言っておくけど、三限までは僕は友達と受けている。だから、成瀬から鍵を預かった後はすぐに友達と合流して行動してたよ。もちろん、部室会館なんて行っていない。

僕の今日の午後の授業は全部、総合教育棟だけで済んだからね。みんな知っての通り、総合教育棟から、この部室会館までは走っても10分弱かかる。授業の合間のたった15分で、総合教育棟と部室会館を行き来するのは無理だよ」

「ちなみに、鍵はその後どうしたんですか？」

「私が受け取ったんです。私、三限は加藤野先輩と全く同じ〈教育心理学〉の講義を取っていたので、その時に顔を合わせたから、三限が始まる前に」

僕の質問には中江先輩が答えてくれた。

「私は今日、三限と四限はあるけど、五限は入ってなかったんで、部会までに部室を開けることもできますから」

「なるほど」

「そのとおりだ。〈教育心理学〉は学年を問わない講義だからね、中江さんと一緒だと分かったときは驚いたよ。まあ、お互い友達と受けているからグループワークすることはないんだけど」

加藤野先輩が中江先輩に笑顔を見せる。中江先輩はほんの少し顔を赤らめていた。

「その後、三限が終わったら、僕は四限の〈日本国憲法〉の授業に出たよ。友達を取ってなかったから、僕一人だけだったけど。

あそうだ、四限が終わったとき、一瞬だけ鍵をもらったよ」

「どういうことだ、加藤野」

「五限がないと勘違いしちゃってさ、部室に行こうと思ったんだ。過去の『はたおり』を読み返したかったからね。

だから部室の鍵を一瞬だけ中江さんからもらったんだけど、すぐに返したよ。五限には授業があったことを思い出したからね」

そうだったよね、と加藤野先輩が中江先輩に問いかけると、中江先輩は頷いた。

「そうです。けどほんの一瞬で、すぐに返してもらいましたよ」

「じゃあそのあとは中江さんが鍵を持っててくれたわけだ。で、鍵を開けてくれたのも中江さん？」

成瀬先輩が中江先輩に問いかけると、彼女は尾道先輩のほうを見た。

「いえ、尾道さんと一緒に。実は、四限の〈データ基礎演習〉は彼と同じ授業を受けてるんです。だから、それが終わったら一緒になって、時間が近づくまで空き教室で授業の課題をしてから、部室に向かったんです」

「ええ、そうっす。一緒に部室まで行って鍵を開けました」

「尾道くん、その時鍵は閉まってた？」

加藤野先輩が尾道先輩に聞く。

「閉まってました。俺、中江さんより先にドアの前に着いたから、ドアをガチャガチャして待ってたんで、確かに鍵は閉まってましたよ」

「そうか。今日の鍵の持ち主を追う限り、誰かが自由に使える時間はなさそうだね」

加藤野先輩は、まるで探偵のように頬杖をついた。

「成瀬から僕が鍵を預かって、その鍵を、今度は僕が中江さんに渡してからは、中江さんはずっと授業に出っぱなしで、授業が終わった後も尾道さんと一緒にいたんだからね」

「ちなみに尾道はさ、今日何してたの？」

成瀬先輩がふいに尾道先輩に尋ねた。尾道先輩は拍子抜けしながら答える。

「え、俺ですか。俺は今日は四限に入ってるだけなんで、午前から四限までは自動車学校に行っていましたよ。四限からは中江さんと一緒だったし」

「そうか」

「えー部長、俺のこと疑ってたんですかー」

「ごめんごめん、気になっただけだよ」

「そういう部長は？ 今日何してたんすか？」

「僕はさっき言った通り、12時半ごろに大学を出てからずっとバイトだよ。ここに駆けつけてくるまでね」

「あ、そっか」

そこで二人は黙り込んだ。お互いに疑いは晴れたようだ。

「まあまあ、成瀬も尾道くんも、仲間を疑うのはよくないよ」

「そんなこと言って、加藤野、お前が一番この状況を楽しんでいるように思うが？ わかっているのか、今回の一番の被害者はお前だぞ。せっかくの小説が載った『はたおり』を台無しにされて」

「まあまあ、それは確かに少し悲しいが、別にいいさ」

「お前な……」

どこか飄々とした加藤野先輩に、成瀬先輩が苦言を呈す。そんな同級生コンビのやり取りを、尾道先輩と中江先輩が苦笑いしながら見ている。

僕はそんな中考えていた。

聞かれてないから言うまでもないが、今日の僕のアリバイは完璧だ。三限と四限は授業があったし、その後は図書館にいた。何より、鍵が部長保管だということも考えてみれば初めて聞いたし。

そういえば、あの時間帯は……。

「雨」

「え」

僕が思わずこぼした言葉に、四人が注目する。

「どういうことだい？ 桂木くん」

「いや、その、三限と四限の時、ちょうど雨が降ってたなと思って」

「……雨、か。確かにそうだったね」

加藤野先輩が何か気づいたように言った。

「あれは三限の途中だったかな、確か午後1時半ごろ。止んだのは……」

「午後5時にはもう止んでたと思います。私と尾道くんが部室会館に行くため総合教育棟を離れたのはその頃で、もう止んでました」

中江先輩がそう言う。そうだったのか、と僕はぼんやり思う。あの時僕は、屋根付きの通路を通して図書館へ行ったから、雨のことはあまり気にならなかったのだ。

「じゃあ、午後は、ほぼずっと雨が降ってたってわけだね」

加藤野先輩はそうつぶやくと、すぐに口角を上げた。

「じゃあ、なおさら僕たちには無理だ」

「どういうことだ、加藤野」

成瀬先輩が驚きのあまりその場に立ち上がった。

「だって見てみろよ。僕たちの中に服が濡れてる人はいるか？」

「いや、いない。

今の話を聞いている限り、僕以外のみんなは授業を受けていた総合教育棟を出てはいないようだ。バイトをしていた僕も、ずっと店の中にいて外には出ていないからね」

成瀬先輩と一緒に、僕たちも加藤野先輩の言うとおりに服が濡れている人がいないことを確かめる。

細かいことを言えば、みんな足元は濡れている。けれどそれは、雨が降った後の大学内を歩いたのだから、その時に水が跳ねたのなら何もおかしくはない。

「少なくとも、午後の雨が降っている間に部室にきた人はいないってわけだ。まあそもそも、午後いっぱいのアリバイは、僕も成瀬も中江さんも、みんな成立しているわけだけど」

「まあ、三限の間のアリバイが俺だけないみたいですけど、俺は一度も鍵を預かってませんからね」

加藤野先輩の言葉に対して、尾道先輩が軽くお手上げのポーズをとっておちゃらけて見せた。

「ちなみに、この中で傘かカッパを持っている人はいる？」

加藤野先輩の問いに、中江先輩が手を挙げた。

「私、折り畳み傘持ってます」

「そうか、見せてくれるかい？」

中江先輩は加藤野先輩の指示通りに、手元のリュックサックを長テーブルの上に置くと、中から白い折り畳み傘を取り出した。丁寧にたたまれていて、濡れている様子は全くない。

加藤野先輩は中江先輩からそれを受け取って、回し見る。

「これです」

「確かに折り畳み傘だ。けれど濡れていないようだね。少なくとも今日は使っていないということだ」

「ええ、使ってないです」

加藤野先輩の言葉に中江先輩がほっとした様子を見せる。加藤野先輩は次に、成瀬先輩と尾道先輩を見た。

「俺も持ってないっすよ」

「僕も持っていない」

二人はそれぞれ、尾道先輩は手提げバッグを、成瀬先輩はショルダーバッグを、中身をテーブルに出して見せた。

「俺なんか、今日は三限だけだから荷物少ないっすよ」

尾道先輩の手提げバッグ、それも大学の入学式でもらった大学のロゴが入ったバッグの中に入っていたのは、パソコンとその充電ケーブル、ペットボトルのコーヒーと財布だった。

「僕もバイト先に大荷物は持っていけないからね」

成瀬先輩のショルダーバッグの中に入っていたのは、財布とスマホ、ハンドタオルとペットボトルのお茶だった。

「桂木くんは、関係ないか。鍵の管理法とか知らなかったもんね」

「そうですね。けど一応言っとくと、僕も傘とかは何も持ってないです」

「そうか。となると、僕の持ち物も見せとかないとね」

加藤野先輩は背負っていたリュックサックを開けると、中から、パソコンと教科書数冊、財布とタオル、保湿クリームとペットボトルの水を出した。

「僕もこれだけだよ」

そして加藤野先輩は今一度、テーブルの上に開けられたみんなの荷物を回し見た。

「今日は朝から晴れだ。久々の晴れの日だから、傘を持っていた人はいないだろう。さすが、中江さんは折り畳み傘を持ってたみたいだけど、僕たち男衆は一人も傘なんて持っていない。

それでいて、この中に服が濡れている人は一人もいない。

ならやはり、鍵を午後の雨が降っている間に持っていた中江さんはもちろん、他の誰もが部室会館に行くことはできない。

午前中鍵を持っていた成瀬も、その友人と一緒に行動していたというならアリバイは確かだ」

「結局お前は何を言いたいんだ、加藤野」

成瀬先輩がどこかあきれ顔で言った。

「だから、少なくとも今いる五人は、この『はたおり』の消失に関係ないということだ」

加藤野先輩は歯を見せて爽やかに笑った。成瀬先輩は大きくため息をついて、尾道先輩と中江先輩は苦笑いを浮かべている。

「なんだったんだ、この時間は……」

「で、結局どうするんすか、部長」

「なくなってるのは本当ですし、どうしましょう」

「そうだな……」

成瀬先輩はまた難しい顔に戻った。

「……さっきも言ったが、今回はあくまで見本がなくなっただけだ。データは業者のほうに残っているだろう。見本ももう一度出してもらえばいいし、学園祭までの出版には何の影響もないし……」

「それに、そもそもこの事を報告しなければ、お咎めもなしですもんね」

尾道先輩がそう少しニヤついて言ったのに対して、成瀬先輩の顔もどこか柔らかくなる。

「……なかったことにしまおうか。もちろん、他に何かなくなってるものがないか調べなくちゃいけないけど」

「さっき私たちが調べた限り、他になくなったものはなさそうでした。なくなったのは見本の冊子だけです」

「そうか……」

成瀬先輩が加藤野先輩のほうを見た。

「お前は思う？」

「さあね。いいんじゃないの、うまく大学をごまかせられれば。ってか、まだばれてすらないのか」

「まあ、そうだが」

「そこは部長も頭を柔らかくしてさ」

加藤野先輩はまた成瀬先輩の背後に回ると、その肩をもみ始めた。

「わざわざ厄介ごとにすることはないさ。もしそうなったら一番立つ瀬がなくなるのは、部長のお前と、何より冊子を持ってきた中江さんだぞ」

「それはそうだが」

中江先輩は相変わらず不安そうな顔をしている。

「ね、だから。下手にことを大きくしないで。なぜか冊子がなくなった、けど鍵の管理はしっかりしてたし、少なくともこの中に犯人はいない。

ならそれでいいだろう。内輪でうまく解決したことにすればいいさ」

ね、ね、と念を押しながら、体重をかけて成瀬先輩の肩をもむ加藤野先輩。成瀬先輩は加藤野先輩の手を払いつつ、一息ついて言った。

「……わかったよ。加藤野、お前の言う通り、僕が責めを負うのは構わないけど、中江さんにその責めが行くのは避けないとな。

今回はなかったことにしよう」

「さすが部長」

加藤野先輩が大げさに拍手する。

「ったくお前は。お前が一番の被害者なんじゃないのか」

「まあ、そうかもしれないけど、別に僕の名前に傷がつくわけじゃない。気にすることはないさ」

「お前のそういうところがうらやましいよ」

成瀬先輩はふっと微笑むと、時計を見た。時計は 18 時 15 分を少し過ぎたところだった。

「どうしようか、今日の部会。見本冊子を読んでチェックする予定だったが、それもできないし」

「終わりでもいいんじゃないすか」

尾道先輩が長テーブルに出した荷物を手提げバッグにしまいながら言った。

「もともと部会は一時間ですし、なんだかんだ話してたらもう部会始まりの時間から四十五分経ってる」

「やることないなら終わりでもいいって？」

「ええ。申し訳ないんですけど、この後荷物が届く予定があって、もともと少し早めに抜けるつもりだったんです。だから、俺はこれで帰らせてもらいます」

尾道先輩はバッグを肩にかけて持つと、ドアノブに手をかけた。

「じゃ、お疲れさまでした」

さっさと出ていく尾道先輩。

「……尾道らしいな。けど、あいつの言う通りか。」

よしみんな、今日はおしまい。お疲れさまでした」

成瀬先輩はそう言って部会を閉じた。

「なら私も」

中江先輩が真っ先に動いた。

「この後、図書館で少し小説書いてから帰ろうと思います」

リュックサックを背負った中江先輩はそうやってドアノブに手をかけて、

「じゃお疲れさまでした」

と言って部屋を出て行った。

「さて、帰るか」

「ああ成瀬」

長テーブルの上の荷物を片付け始めた成瀬先輩に、加藤野先輩が声をかけた。

「鍵置いて行ってくれないか。せっかくだ、ここで少しだけ執筆してから帰るよ」

「そうか」

「明日の昼休み会えるか？ その時に鍵は返そう」

「わかったよ、なくさないでくれよ」

成瀬先輩が加藤野先輩に、鍵を投げて渡した。

「お預かりするよ」

「なら、お先に失礼。桂木くんも帰っていいんだからね」

ショルダーバッグを持った成瀬先輩が僕に声をかける。

「ああ、僕も少しだけ小説書いていきます」

「そうか。なら、お疲れさん」

成瀬先輩は眼鏡をくいと動かすと、ドアを開けて部屋を出て行った。

僕は、加藤野先輩を二人残った部屋で、加藤野先輩と斜め向かいの席に座って紙とシャーペンを出した。そして、簡単な表を書いた。先輩たち四人の午後の予定をまとめたものだ。

加藤野先輩は昼休み後、三限から四限まで授業が入っている。三限は中江先輩と一

緒だ。

成瀬先輩は昼休みの途中からバイトのために大学を出ている。帰ってきたのは、部会が始まった後だ。

中江先輩は、加藤野先輩と同じ三限の授業を受けた後、尾道先輩と同じ四限の授業を受け、そのあとは尾道先輩と行動している。

尾道先輩は午前中は自動車学校にいて、中江先輩と同じ四限の授業を受けた後、そのあとは中江先輩と行動している。

そして何より、三限の途中から、五限の途中の 17 時ごろまで雨が降っていた。僕は、表の雨が降っていた時間帯に斜線を入れた。

そして、鍵の受け渡し。成瀬先輩が昼休みまでは持っていたが、その途中で加藤野先輩に渡した。加藤野先輩は三限の前に、鍵を中江先輩に渡した。そして、そのあとは部会前に部室を開けるまで中江先輩がずっと鍵を持っていた。

僕は、表の中に鍵が動いた行く末をなぞるようにして、青ペンで矢印を書き入れた。

表という目に見える形で、初めて今日の午後のあらましを理解することができた。そしてさらに、僕の頭の中には、さっきの先輩たちの話が確かに残っている。

僕は少しの間目を閉じた。そして深呼吸をする。

……なるほど。見えてきた。

「桂木くん、君も探偵ごっこかい？」

さっき長テーブルの上に出した荷物をそのままにして、いつの間にか起動したパソコンに向かい合っていた。

「探偵ごっこなんて不謹慎なことをするのは、僕一人で十分だよ」

そう優しい笑みを浮かべる加藤野先輩。

「いえいえ、探偵ごっこなんて。僕は所詮ただの学生ですから」

僕は書いていた表を見ながら答える。

「なにそれ。もしかして今日のことを表にしたの？」

見せて見せて、と体を乗り出す加藤野先輩。

「よくできてるね～。すごいじゃん、桂木くん。」

けどやっぱり、この四人の中に、今日の午後、この部室まで来れる人はいなさそうだね。

もしこの中に犯人がいるのなら、立派な完全犯罪だ」

加藤野先輩はそう言って笑う。

「そうかもしれないですね」

僕も、その眩しい笑顔をみて笑う。

数秒間その笑いが続いた後、また部屋の中に沈黙が戻ってきた。加藤野先輩のパソコンのキーボードを打つ音だけが部屋に響く。

僕はその沈黙を静かに破るようにして言葉を紡ぎだす。

「そういえば先輩、楽単って知ってますか？」

「楽に取れる単位ってやつだろう」

「先輩は興味ありますか？」

「んーそうだなー。興味がないと言ったらウソになるのかもしれないけど、まあ、大学という学びの場においてはあまり良いものではないよね。僕はその考えで履修を選んだことはないな」

百点満点の回答だ。楽単を否定はせず、それでいて自身の潔白も証明する。加藤野先輩らしい答え方だ。

「そうですよね、さすが加藤野先輩。」

実は、友達がそういうのに興味があって、それこそ今日の昼休み、楽単のリストを見せてもらったんですよ」

「へえ、そうなんだ。けど桂木くんも興味はないだろう」

「まあ、そうですけど」

「さすがだね」

加藤野先輩に「さすが」と褒められて、少しうれしくなる僕。だから、次に話すことに対して、少しだけためらってしまった。

「いろいろありましたよ。日本古典とか、芸術史概論とか」

「ああ確かに噂には聞くね」

「その中に、ありましたよ。」

日本国憲法の授業も」

パソコンのキーボード音が止まった。

「木4、つまり木曜日の四限に開講する日本国憲法の授業です。友達の話だと、出席を取らないから、遅刻や早退も気にされないとか」

加藤野先輩はふふっと小さく笑った。

「よく覚えていたね」

「ええ。さっきの話で言ってましたよね、木曜日の今日、加藤野先輩は四限に日本国憲法の授業を受けてたって」

「そうだよ。楽単と言われてる、日本国憲法さ」

僕は加藤野先輩のその言葉を聞いて、表に赤ペンを書き入れた。加藤野先輩の四限の欄を囲うように。

「先輩の言葉を借りれば、この時間の先輩のアリバイは崩れたわけですね」

「……そうだね。遅刻や早退は自由だから」

そう言った加藤野先輩の様子に、僕はどこか違和感を持った。どこか、ほっとしているように見えたのだ。

そんな加藤野先輩がどこか儚げに思えて、僕はそれを傷つけまいと心中で念じながら、慎重に言葉を紡ぐ。

「これから話すことには証拠もありませんし、あくまで僕の想像にしかすぎません。

……『はたおり』の見本冊子を持ち出したのは、先輩ですね」

僕と加藤野先輩の視線が交差する。時間が止まったかのように思った。

加藤野先輩の瞳には欠片の輝きもなかった。まるで虚空を見るような目で僕を見ている。

戸惑いと同時に少しの恐怖も感じた僕は、うまく視線をそらして話を続けた。

「この時間に、先輩はこの部室まで来ることができたんです。だから、見本の冊子を持ち出すこともできますよね」

「……そうだね」

少し間を開けてから答えた加藤野先輩は、視線をいったん落としてから、面白いことになったとばかりに口角を上げてパソコンを閉じた。

「けど、鍵のことがあるでしょ。鍵はその時、中江さんが持ってたんだ。三限の前に中江さんに鍵を渡してしまった僕は、四限の間にここに来れたとしても、部室に入ることはできないよ」

「……大げさな言い方をすれば、トリックです」

僕はそう言って、表に矢印を書き入れるために赤ペンを手に持った。

「鍵は二個あったんです。本物の部室の鍵と、先輩が用意した偽物の鍵」

僕がそう言うと、加藤野先輩は成瀬先輩から渡された鍵を出して長テーブルの上に出した。

「なるほどね。部室の鍵自体はよくある型の鍵だから、ネームプレートだけ作れば簡単にごまかせそうだ」

「……そうです」

さっきから、加藤野先輩の反応は変だ。僕が彼の罪を暴こうとしているのに、それを拒む様子は全くない。かえって、僕が謎を解くのを楽しんでいるようにすら思う。

「入れ替えたのは、三限が始まる前に中江さんに鍵を渡したときですね。あの時先輩は、自分で用意した偽物の鍵を中江先輩に渡したんです」

そして、四限が始まったとき、先輩は部室の鍵を持ってここまで来た。そして部室を開けて、中にあった見本冊子を持ち出したんです」

「良い推理だね。確かに僕は、四限が終わった後、中江さんから一度だけ鍵を預かった。その時に、中江さんに持たせていた偽物の鍵と、四限の間に使った本物の鍵を交換することは容易だろうね」

「……その通りです」

僕がそう言うと、加藤野先輩は僕に、赤ペンを渡すよう促した。僕が思わず渡すと、加藤野先輩は僕の手元の表を取って、赤ペンで書き足した。

「君の推理だと、部室の鍵は、実際にはこう動いたといたいんだね」

昼休み中に成瀬先輩から加藤野先輩に、そして加藤野先輩はそのまま鍵を四限終わりまで持ち続け、それから中江先輩に返した。その経路をなぞるように、加藤野先輩は自ら赤ペンで矢印を書き足した。

「そうです」

「なるほど」

加藤野先輩は赤ペンを表の上に置くと、また僕の顔を見て不敵に笑った。

「いいね、桂木くん。君のその推理力と観察力は、ただの小説家というより推理小説家に向いているんじゃないのかな」

「……」

「ま、こんなことを言うのは大抵犯人だけか」

そう加藤野先輩は笑った。さっきまでの話の間、目が泳ぐ様子も焦る様子も一切ない。僕はそんな加藤野先輩の様子をずっと不思議に感じていた。

そんな僕の気も知らず、加藤野先輩はまた不敵に笑った。

「けど桂木くん。君は忘れていることがある。

雨だ。三限の途中から五限の途中まで雨が降っていた。傘もカップも持っていない僕が、どうやって濡れることなくこの部室まで来れたというんだい？」

まるで僕に挑戦しているような視線で、僕を見上げる加藤野先輩。

「忘れていたんです」

僕は話を続けた。

「傘と、使用目的は違えど、その形や使い方が酷似しているため、傘に代わって使うことができるものを」

「……それは何かな」

「先輩の今日の持ち物を覚えていますか。教科書とパソコン、タオル、ペットボトル、保湿クリーム。いたって普通でした。

けど、先輩だとしたら持ってたはずのものがなかったんです」

「それは？」

「日焼け防止グッズです」

僕の言葉に、初めて加藤野先輩の目頭がぴくんと動いた。

「中江先輩に言ってましたよね、日焼けと乾燥は気を付けないって。

先輩、乾燥を防止する保湿クリームは持ってましたけど、日焼けを防止する道具は持っていなかったんで、不思議に思ったんです。

だからこう思いました。先輩、持ってたんじゃないんですか」

僕は加藤野先輩の目を見据えた。

「太陽の光を避ける道具、日傘を」

「……ふっ」

加藤野先輩はふっと嘲笑にも似た笑いを見せると、顔をそむけた。どんな顔をしているのか、顔色を読むことができない。

「知っての通り、日傘は、避けるのが雨か太陽かの違いで、形も使い方もほとんど一緒です。けれど多くの日傘は、雨の中で使うと表面のコーティングがダメになってしまうと聞きます。

きっと、先輩の日傘もそうだったんじゃないんですか。

四限の時間に部室まで行くときに、雨の中、傘の代わりに日傘を使ったせいで、先輩の日傘はダメになってしまった。だから、それがばれてしまわないように、持ち出した『はたおり』の冊子と一緒にどこかに隠したんじゃないんですか」

「……」

加藤野先輩は顔をそむけたまま動く気配もない。僕は続ける。

「さっきも言った通り、これはあくまで僕の想像だし、証拠も何もありません。だからこの推理自体も穴だらけです。

ただ、今僕が持っている情報と知っている状況を考えると、この推理が一番当てはまると思ったんです。それだけです」

僕はそこで一息ついた。僕の話したかったことは、全て話した。

「……一つだけわからないことが」

「動機だろ」

僕が尋ねようとしたとき、食い気味に加藤野先輩が言葉を発した。

「ええ、そうです」

「そうだよ、気になるよね」

加藤野先輩はさっきまでの優しい口調を一切変えることなく、話し出した。

「あれ、桂木くんはさ、僕の例の小説読んだんだっけ」

「『梅雨のエゴイスト』ですよ。読んだことはありません」

「そうか」

その時、加藤野先輩はひどく安心したような顔を見ると、ガクッと顔をうつむけた。
「よかった」

「よかった？」

「僕はね、あの小説が」

顔を上げた加藤野先輩、僕は彼の顔を見て背筋が凍った。

「嫌いなんだよ」

死人のような目で、僕ではなく虚空を見つめる加藤野先輩。低い声で言った「嫌い」という言葉に、僕は何も言えなかった。

「あんなの僕の小説じゃないさ」

「いったい、どういう話なんですか。その『梅雨のエゴイスト』は」

「さあね、僕にもよくわからないよ」

加藤野先輩は顔を変えることなく、抑揚のない口調で言った。

「あれは、僕が書いた小説なんかじゃない。僕の中の、人に評価されたいと願う卑劣な性格が、人に評価されるがために、人の評価する点を満たそうというだけの目的のもと書き連ねた、中身のない文章だよ」

抑揚はないが、そう語る加藤野先輩の表情はわずかに震えている。何か言いようのない思いを噛み殺しているような口ぶりだった。

「話自体は簡単さ、過去に友人たちに対して罪を犯してしまった主人公が、また罪を犯すことを躊躇する、そんなくだらないおとぎ話だよ。」

その主人公はエゴイストなんだ。自分が恋しくて、愛しくて、大切にたまらないのさ。だから、罪を犯すし、それを隠そうともする。けど、その罪を犯す自分も、犯すことをためらう自分も、結局どちらも大好きなんだよ。

『今から僕がしようとするのは悪いことか。』

それによって、傷つく人は、涙を流す人は、いないのか。』

……言うのもこそばゆい、くっさいセリフだ。こんな言葉を吐くなんて、僕の書く物語の主人公も、いつのまにかダサくなったものだよ」

そう言って自嘲の笑みを浮かべる加藤野先輩。その時初めて、虚ろだった彼の表情が動いたが、その笑みはこれまでの加藤野先輩が見せたことのない皮肉の笑みだった。

「だから、読まれたくなかった。あんな人からの評価を得るためだけに書いた小説、読まれたくなかった。

昨日、中江さんが、見本が届いたと言ったときだよ。どうしても、その感情を押し殺すことができなくなったのは。

君の言う通り、百均で買ったネームプレートに、家にあったテプラで【文芸部 部室】のテープを作って貼り、偽物の鍵を作った。

即興で作った割には、うまくごまかせたんじゃないかな」

加藤野先輩はそう言ってまた皮肉気に笑った。

「後も君の言う通りだ。遅刻してもばれない四限の時間に行こうと思ったら雨が降ってね、仕方なく持っていた日傘を使った。

そして、見本冊子を持ち出した。

ちなみに言っとくと、見本冊子と使ってダメになった日傘はどちらも、大学のコインロッカーに隠してあるよ。後で捨てようと思ってね」

加藤野先輩はポケットからコインロッカーのカギを取り出して、顔の前でぶらぶらと揺らして見せた。

「けど、バカだよねぇ僕も。見本冊子を読まれたくない、急いで何とかしないと。それだけで頭がいっぱいだった。

だから、成瀬の言う通り、業者にはデータが残っていることをすっかり忘れていたよ。見本を捨てたって、意味はなかったのにね」

加藤野先輩はまた皮肉気に笑った。自分の愚かさに呆れるような、そんな笑いこぼしながら肩を小刻みに揺らしていた。

「わからなくは、ありません」

僕は、そう言っていた。

「桂木くん」

「だって、僕にもいます。食欲に他人の評価を求めてしまう、みじめな自分が」

そう言って僕も笑って見せる。けどきっと、それが無理やり作った笑顔であることくらい、加藤野先輩はお見通しのはずだ。

「そうか。ありがとう」

加藤野先輩はまた笑った。けれど今度は、凝り固まっていた重い憑き物が、一気に晴れたような笑顔だった。

「……さて、どうする。桂木くん。

君の推理には、僕を糾弾できるほどの証拠は一つもない。だが、僕は認めよう。

確かに、今回の『はたおり』の見本冊子を部室から持ち出したのは、僕だ」

加藤野先輩は僕に言った。

「不思議だよ。こんな大それたことをしでかしたのに、全く反省しようと思えないんだ。

根本的な解決にはなっていないからだろうか。だって、こうして見本を持ち出したわけだけど、『はたおり』自体はおそらく無事に出版されるはずだ。

ただ、僕はその事実には抗いたかっただけだ。自分を救済するために、少しでも歯向かいたかった、その結果が今回のことだ。

反省の気持ちが浮かばないのは、僕自身、悪いことをしたつもりはないからかもしれないね」

加藤野先輩はぶつぶつと口にする。そして、こう僕に尋ねた。

「さあ、桂木くん。一体、僕をどうするんだい」

答えは決まっている。けれど。

「先輩はどうするつもりですか」

「んーそうだな。おそらく僕は、自分からみんなに話すことはないだろうね。

ただでさえあんな駄作を世に出されようというのに、それ以上に、それを止めるために窃盗まがいの行動を犯したことをみんなに知られるなんて、耐えられないだろう」

加藤野先輩は身を乗り出した。

その表情は、また初めて見るものだった。

まるで、僕という存在に縋りつくような、どこか弱弱しい雰囲気をもっていた。

僕が憧れた加藤野先輩は、そこにはいなかった。

「わかってる、わかってるさ。これはエゴなんだよ。僕も、僕のことをかわいいんだ。守ってやりたいんだ。

桂木くん、君はどう思う」

「僕は……」

僕は、加藤野先輩に答える。

僕の中ですでに出ていた答えだ。

何の後悔も憂いもない。

きっと、僕は、歪んだ笑顔を顔に張り付けていたに違いない。

今から僕がしようとする事は悪いことか。

それによって、傷つく人は、涙を流す人は、いないのか。

僕は、僕の心に問いかける。

いや、これは悪いことではない。救済だ。

誰かによる、誰かのための——僕による、僕のための救済なのだ。

そして、僕は、ドラム缶の中に加藤野先輩から預かった三冊の見本冊子があるのを確かめると、手元の新聞紙にチャッカマンで着火し、燃え盛るその新聞紙を中に投げ入れた。めらめらと、煙を上げながら赤い線にじわじわと侵略されていく冊子。

僕は、いつまでもそれを眺めていた。

誰かに頼られる。

誰かのために何かをする。

そんな時に、僕は至高の悦に入る。

何もない僕が、喜びで、満たされる。

日傘/高瀬静

日傘/高瀬静

日傘

高瀬 静

現し世は、かげりの中でたよりなく揺らぐおのれの身体^{からだ}を見つめ、泣いている。涙は夜を溶かしこみ、天^{あめ}の硝子^{あかがね}を黒く染めゆく。銅の針で涙をすくいあげ、冴えわたる地^{つち}に滑らせてゆく。か細くも、たしかな道が描かれて、そこに現^{うつ}の種が萌え立つ。花の色、葉の愚かしさ、鳥の嘘、のたうちまわる天地^{あめつち}の声。現し世が忘れたものを飲み込んで、種は、遙かな虚を目指す。

現し世がやがて虚の境目で、涙の黒を洗い流せば、あれほどに揺らいだ骨や肉や皮、身体すべてが熱を手に入れ、いつの日か忘れた熱を手に入れて、朝よりあかく光り輝く。もの、ことの汀はかくて定められ、星は虚をまわり続ける。

今日^{こんにち}も、うつつの隅で蹲る彼の腕^{かいな}でまわる戯れ事。

そして、彼は万年筆の蓋を閉めた。彼が顔を上げると、部屋に唯一ある小窓から曇天が見えた。何かを押しつぶそうとしているようだった。時計の針は早朝の七時を指し示していた。彼は、埃まみれのリュックサックを乱暴につかみ、生活の気配の薄弱なワンルームを出た。

今にも雨の降りだしそうな暗い道には、彼の足音だけが響いた。明朝の散歩にいそしむ老人も、ランニングをする若者も、犬も猫も、この時期になると姿を見せなくなった。それがむしろ、彼の足取りを軽くさせた。誰の目にも触れないように、誰の世界にも介入しないように、何時だって項垂れていた彼も、この時期ばかりは面を上げた。だから、彼の視界はいつもよりも開けていた。

その開かれた視界の端に、彼は轢死した蛙の死骸を見つけた。飛び散った血と臓物が雲の上から微かに注ぐ光を反射して、ぬらりと輝いていた。その赤は、薄汚れた体表の白によく映えた。まだ、蟻も集っていなかった。

時間に余裕があったので、彼はしばらくそれを見つめていた。腹から飛び出した臓腑を、遠い昔に開いた生物の教科書と照らし合わせてみたりした。この長いやつは腸、この丸いやつは胃、この暗いやつは肺、もしくは心臓……。そんなに面白くもなかった。

二、三分そうやって時間をつぶして、彼はまた歩きはじめた。彼は、帰りにも残っているようなら弔ってやろうか、と、考えた。誰の目にも触れず、誰の世界にも介入せず、

蟻にすら見向きもされず、たった一つ転がっている蛙の死骸の存在に、彼は言い知れぬ快さを感じていた。

そのうち雨が降り出した。彼は傘を持っていなかった。辛うじてリュックサックを雨除けにしたものの、彼が事務所に到着する頃には既に、彼は濡れた鼠になっていた。

そんな彼を、中年は蛇の目で見すえた。

「おはよう、佐藤君」

「おはようございます」

「傘ぐらい持っておきなさい、みっともない」

「はあ、すみません」

「なにか拭くものは」

「いえ、あの」

「持っていないのか。全く、なんにも持っていないんだな君は」

「はあ」

「ともかく。誰かにタオルを借りるなりして、さっさと身だしなみを整えなさい。くれぐれも朝礼には遅れないように」

「はあ、すみません」

吐き捨てるように言って、中年は事務所から出て行った。彼は佐藤ではなかったし、タオルを借りられるような知り合いもいなかった。でも、それを指摘できるほど彼の舌は器用ではなかった。

仕方なく、彼はリュックサックの表面で体を拭いた。リュックサック自体も濡れていたもので、その作業は随分と骨が折れた。ようやく人前に出られるくらいになった時、事務所の時計は朝礼の時刻の五分後を指し示していた。彼はため息を一つ吐いて、早足に事務所を出た。

現場には十数人が集まっていた。その前で、さっきの中年が気だるげに何かを話していた。近づく彼に気が付くと、人々の目が一斉に彼を射抜いた。中年は一瞬間話をやめ、舌打ちをして、すぐにまた話を再開した。彼は消えてしまいたくなった。

中年がテンプレートの題目を話し終わり、人々は各々だらだらと持ち場に着いた。彼もベルトコンベヤの前に立った。

彼の業務が流れてきた。誰かが作った部品と誰かが作った部品を組み合わせ、別の部品を作り、それをまた誰かに流していく、単純な業務であった。彼にとっては、蛙の

轢死体を観察するよりも退屈で、意味のない業務であった。不愉快ですらあった。手を動かすほどに、彼は、自分の中に溜まっていた素敵なのが漏れ出して、代わりにセメントを流し込まれているような感覚を覚えていた。

もうやめよう、と、色あせた決意が彼の胸元を掠めた。しかし、彼はそれをすぐに押しつぶした。確かに、彼にとって現場での時間はナンセンスであったか、かといって、現場の外に意味があるとも思えなかった。彼には、ベルトコンベヤに乗った部品と世界のほとんどとを弁別することが出来なかった。それら全ては同様に、彼の世界の外側に存在するものであった。

「終了。おつかれさん」

中年の号令で、一日の業務が終了した。昼休憩を除いてきっかり八時間、彼は業務に従事した。

外はもう暗くなりかかっていた。激しい雨が降っていた。傘を差した会社員や学生が何人か、足早に歩いていた。彼は、朝と同じようにリュックサックを頭に掲げ、朝よりも俯きながら、帰路を急いだ。

自宅のすぐ前まで来て、彼は蛙のことを思い出した。この雨だから、きっと流されてしまっただろう、と、半ばあきらめながらも、どうしても気になって、彼は帰路を引き返した。

蛙はあった。何本かの木の枝が刺さっていた。臓物の形がわからなくなっていた。定めし、近所の小学生の悪戯であろう。彼には、その蛙が朝より色あせて見えた。蛙の死体は部品になった。

現し世は、{韓紅 | からくれない}に染まりつつある胃袋をまた吐き出して、しげしげと眺めてみては、また、笑う。色を無くした虚を回る星々にこの紅を贈ろうと、小さな夢を胸に浮かべて。

でも、しかし、はらわたはすぐ色あせる。星は回れど色は得られず、重たくてひだるい時が垂れ込めて、現を包む。なにも知らずに現は笑う。愚かしい現の夢を指さして、鬼も笑えば神も笑う。涙さえ流して笑う。笑い転げる。涙は夜と毒を溶かして、やはり硝子を黒く染めゆく。汚れた涙に銅をも錆びる。道は醜くうねる。うねる。うねる。種は腐る。現は歪む。

今日も、うつつの隅で蹲る彼の腕でまわる戯れ事。

そして、彼は万年筆を投げ出した。地雨が小窓を単調なリズムで叩いていた。雨滴でめちやくちやくにかき混ぜられた空の灰色を見つめていると、彼の顚顚^{しょうじゅ}に疼痛が迸った。眼窩で線香花火が燃えているようだった。時計の針は早朝の七時を指していた。彼は埃まみれのリュックサックと柄の割れた折り畳み傘を弱弱しくつかみ、倒れこむ様にして玄関を出た。

夜よりも暗い道には車軸を流す雨が降り注ぎ、彼の足音すら響かなかった。時折通る車両のヘッドライトが、彼の視神経に火をくべた。彼は何度も吐き気を催した。

折り畳み傘は、骨が二本折れていた。彼はそれがひどく恥ずかしかった。恥ずかしくて、いっそ閉じてしまおうかとも思った。しかし、この大雨の中、傘もささずに歩くのはもっと恥ずかしかった。道には彼の他には誰もいなかったが、それでも彼は、誰かに見られているような気がしていた。

雨脚はどんどん強まっていった。いよいよ、彼の粗末な折り畳み傘が役に立たなくなっていた。そのうち風も吹いてきた。強風は脆弱な傘骨を、さらに何本か押し折った。それでも、彼は、傘を差し続けた。

事務所の前に着いたとき、彼の手には、最早何の用もなさないアルミニウムとナイロンからなる不燃ごみが握られていた。みすぼらしく、みっともなかった。彼はそれを、近くの茂みに投げ込んで事務所に入った。帰りのことは何も考えていなかった。考えられなかった。

事務所は無人であった。彼は誰にも会わないうちに、急いで現場へと向かった。

現場には十数人が集まっていた。しかし、中年の姿はどこにもなかった。彼は少し安心した。できることならこのまま来ないでほしい、と、彼は思った。結局、中年は来ないまま、作業開始時刻になった。人々はそれぞれの持ち場に着いた。

彼の業務が流れてきた。いつもと全く同じ、退屈で無意味な業務であった。特に今日に限っては、頭痛と吐き気が、彼の業務をさらに耐え難いものにしていった。部品を見ると眼窩が疼いた。部品に触れると吐き気が増した。部品を組み合わせるほどに意識が混濁した。もはや自分が何をしているのかさえ、彼には分らなかった。

突然けたたましい警告音が鳴った。一斉にベルトコンベヤが止まった。赤い回転灯は内部機構のトラブルを示していた。現場がにわかに騒がしくなった。一斉に点検作業が始まった。

種々の機器が分解され、中身を引っ掻き回されているのを、彼はぼんやりと眺めていた。黒ずんだ歯車や配線やよくわからない鉄の塊を見ると、彼は、いつかの蛙の臓物を思い出した。それらはよく似ていた。

技師たちの手によって、部品が一つ取り出された。それは、本来そこにあるべきでない部品であった。どこからか入り込んで、モーターの駆動を妨げていたのだった。つまるところ、その部品が機器の不具合の原因であった。

彼が組み立てた部品であった。

「はあ」

彼の背後からため息が聞こえた。

「これ、君んところのだろ」

「は」

「君、もう今日は帰りなよ」

いつの間にか来ていた中年は不機嫌そうに言った。

「いえ、あの」

「顔、白いよ。体調悪いんだろ。もういいから」

彼は何も言わずに頭を下げて、現場から飛び出した。

雨はもう上がっていた。

いつもより早い帰宅であった。丁度、下校時間であった。雲間から注ぐ黄金色の日光を浴びて、子供たちはさも愉快そうに歩いていた。騒々しい声が頭に響いた。ランドセルの鮮烈な色彩が眩しかった。彼は俯きながら歩いた。少しでも早く帰りたいのに、歩を進めるほどに彼の足は重たくなっていった。

湿潤したアスファルトがきらきらと輝いていた。彼はふと、視界の端に見覚えのある黒を捉えた。小学生が、ナイロン布が引っ掛かった金属簿を振り回していた。それは、まさに彼が、朝、打った傘の一部であった。

現し世は、何処にありや。何処にありや。

隠り世は、此方にあらむ。此方にあらむ。

吾が身は、

そして、万年筆が折れた。インクが原稿用紙の上に飛び散った。彼が長々と書き溜めてきた雑文が、インクに染まって読めなくなった。小窓から差し込む日光を反射して、インクが、白く見えたり黒く見えたりした。

時計は九時を指し示していた。朝礼の時間をとくに過ぎていた。頭がひどく痛んだ。まだ、眼窩の線香花火は燃え続けていた。彼はリュックサックを掴んで、生活の気配の薄弱なワンルームを出た。

とても暑い日だった。道には多くの人々がいた。彼は俯かずに、その人々を眺めながら歩いた。天下の陽気に不釣り合いな服装の人もいた。サンダルをはいた子供たちが走り回っていた。缶ビールを片手にもった老人もいた。背広姿の中年とすれ違うと汗のにおいが立った。道にへばりついた土竜が干からびていた。蟬の鳴き声も聞こえた。

親子を覆う、一本の日傘が目についた。凝った装飾のついた漆黒の日傘であった。その影の下で、子は前を見、親は子を見ていた。

「一」

親が子の名を呼んだ。彼はその名前に聞き覚えがあった。彼と同じ名前であった。線香花火が消えた。

日傘の影がいつまでも、彼の臉にちらついていた。

部屋に唯一ある小窓から晴天が見える。彼はもう顔を上げない。生活の気配の薄弱なワンルームの中心で、日光を反射して、彼だけが赤黒く輝いている。彼は部品になった。

奥付

奥付

奥付

案山子 2024夏号

<https://puboo.jp/books/page/write/135031>

著者：新潟大学文芸部

<https://puboo.jp/users/sindaibungeibu>

電子書籍プラットフォーム：パプー（<https://puboo.jp/>）

運営会社：デザインエッグ株式会社

案山子二〇二四 夏

著 新潟大学文芸部

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
